西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

――緊急発掘調査報告――

丸山清水B遺跡

1978

伊那市教育委員会

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

――緊急発掘調査報告――

丸山清水B遺跡

1978

伊　那　市　教　育　委　員　会

序

昭和52年度西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）の一環として伊那市平沢・丸山清水遺跡の発掘調査が10月下旬から11月上旬にかけて実施された。

この，伊那市平沢地区は，伊那市内では西部地区に，また，木曽山脈の山麓地帯に，さらに，小沢川の左岸段丘面に位置している。湧水がいたるところにみられ，いかにも，原始人，古代人達の居住しそうな場所であったので，当初より，今回の調査には，大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は，報告書に見られるように予期を遙かに上回る遺構，遺物の発見が多かった。内容的には縄文中期の竪穴住居址20軒，平安時代の竪穴位居址３軒，土坑17基の遺構数を数えられる。

報告書の刊行に当って，この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所，深いご指導をいただいた長野県教育委員会，この発掘調査に精励された友野団長を始めとする調査団の各位，この調査のためにご協力いただいた地元土地改良事務所の各位，直接的に協力いただいた作業員各位に対し，深甚な謝意を表する次第である。

昭和53年３月３日

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

凡　　例

1．今回の発掘調査は西部開発に伴なう，県営畑地帯総合土地改良事業で，第5次緊急発掘調査にもとずく報告書とする。

2．この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で，国・県・市の補助金のもとに事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3．本調査は，昭和52年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯　塚　政　美，　田　畑　辰　雄

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄，荻原　茂

◎写真撮影

○発掘・遺構及び遺物

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

5．本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　例
目　次
　挿図目次
　表　目次
　図版目次

第Ⅰ章　遺　　構……（1～22）
　第1節　住 居 址……（1～18）
　第2節　土　　坑……（19～22）
　第3節　第1号ロームマウンド……（22）

第Ⅱ章　遺　　物……（23～29）
　第1節　土　　器……（23～28）
　第2節　石　　器……（29）

第Ⅲ章　ま と め……（30）

挿　図　目　次

第 1 図　遺構配置図……（1）
第 2 図　第1号住居址実測図……（2）
第 3 図　第2号（上）・3号住居址（下），第17号土坑（下）実測図 ……（3）
第 4 図　第4号住居址及び第1号土坑実測図……（4）
第 5 図　第4号住居址埋甕断面図……（5）
第 6 図　第5号住居址実測図……（6）
第 7 図　第5号住居址炉址断面図……（6）
第 8 図　第6号・7号住居址実測図……（7）
第 9 図　第8号・13号住居址・第7号・8号・9号・15号・16号土坑実測図……（8）
第10図　第8号住居址カマド実測図 ……（9）
第11図　第9号・14号住居址実測図……（9）
第12図　第9号住居址埋甕断面図……（9）
第13図　第10・15・16号住居址実測図……（10）
第14図　第11号住居址，第12～14号土坑，第1号ロームマウンド実測図 ……（11）
第15図　第11号住居址埋甕1断面図……（11）
第16図　第11号住居址埋甕2断面図 ……（12）
第17図　第12号住居址・第3号土坑・第11号土坑実測図……（12）
第18図　第13号住居址カマド実測図……（12）
第19図　第17号住居址実測図……（14）
第20図　第17号住居址カマド実測図……（14）
第21図　第18号・22号住居址実測図……（14）
第22図　第19号住居址実測図……（15）
第23図　第20号住居址実測図……（16）
第24図　第21号住居址実測図……（17）
第25図　第23号住居址実測図……（18）
第26図　第2号土坑実測図……（19）
第27図　第4号土坑実測図……（20）
第28図　第5号土坑実測図……（20）
第29図　第6号土坑実測図……（20）
第30図　第10号土坑実測図……（21）

表　目　次

第 1 表　出土土器の形状一覧表（その 1）……（23）
第 2 表　出土土器の形状一覧表（その 2）……（23）
第 3 表　出土土器の形状一覧表（その 3）……（24）
第 4 表　出土土器の形状一覧表（その 4）……（24）
第 5 表　出土土器の形状一覧表（その 5）……（24）
第 6 表　出土土器の形状一覧表（その 6）……（25）
第 7 表　出土土器の形状一覧表（その 7）……（25）
第 8 表　出土土器の形状一覧表（その 8）……（25）
第 9 表　出土土器の形状一覧表（その 9）……（26）
第 10 表　出土土器の形状一覧表（その10）……（26）
第 11 表　出土土器の形状一覧表（その11）……（26）
第 12 表　出土土器の形状一覧表（その12）……（27）
第 13 表　出土土器の形状一覧表（その13）……（27）
第 14 表　出土土器の形状一覧表（その14）……（27）
第 15 表　出土土器の形状一覧表（その15）……（28）
第 16 表　出土土器の形状一覧表（その16）……（28）
第 17 表　出土土器の形状一覧表（その17）……（28）
第 18 表　出土石器の形状一覧表（その 1）……（29）
第 19 表　出土石器の形状一覧表（その 2）……（29）

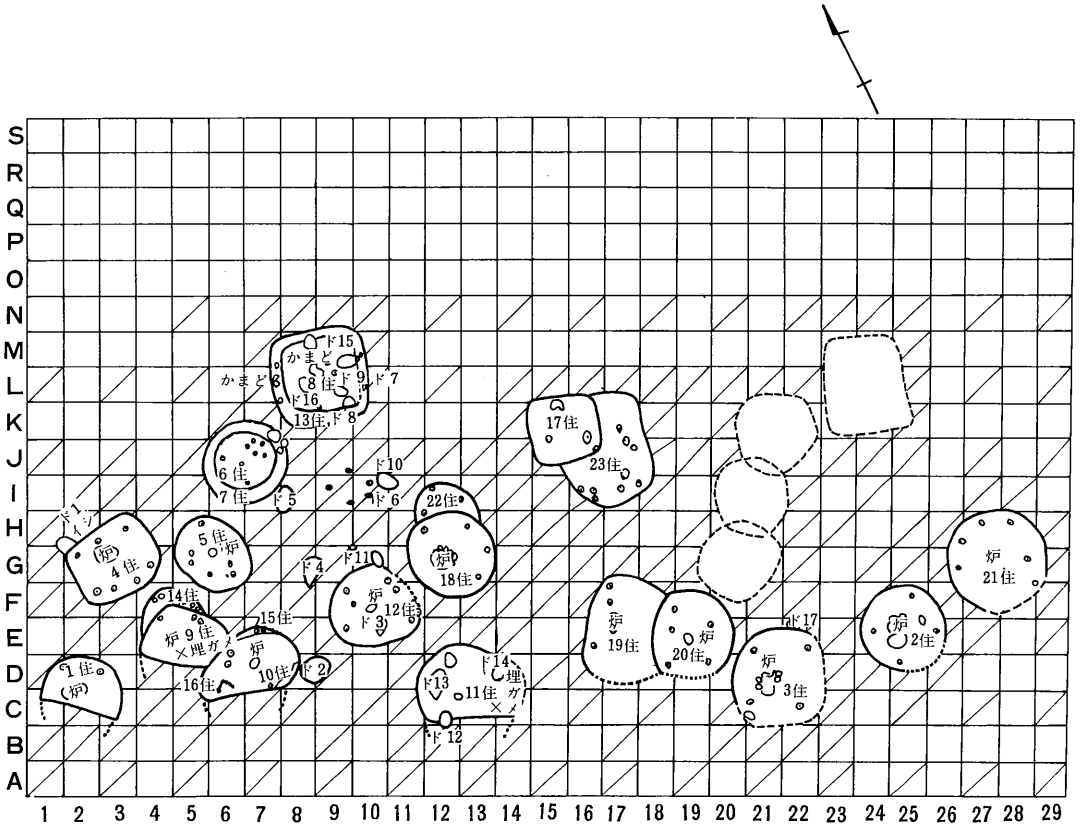
図　版　目　次

図版 1　遺跡全景
図版 2　遺　構
図版 3　遺　構
図版 4　遺　構
図版 5　遺　構
図版 6　遺　構
図版 7　遺　構
図版 8　遺　構
図版 9　遺　構
図版 10　遺　構
図版 11　遺　構

図版 12　遺　　構
図版 13　遺　　構
図版 14　遺物出土状況
図版 15　出土土器
図版 16　出土土器
図版 17　出土土器
図版 18　出土土器
図版 19　出土土器
図版 20　出土土器
図版 21　出土土器
図版 22　出土土器
図版 23　出土土器
図版 24　出土土器
図版 25　出土土器
図版 26　出土土器
図版 27　出土土器
図版 28　出土土器
図版 29　出土土器
図版 30　出土土器
図版 31　出土土器
図版 32　出土石器
図版 33　出土石器
図版 34　発掘風景

第Ⅰ章　遺　　構

第1節　住居址



第1図　遺構配置図（住－住居址　ド－土坑）　0　10m

第1号住居址（第2図，図版2）

グリット設定地区の最南，最西地区に単独な状況で発見された。東西3m 75cm，南北では，南側は桑の攪乱のために破壊されてしまって存在していないが，推定では4m前後を計測できる。黄褐色土層を掘り込んだ竪穴住居址で，平面プランは南北に長い円形状を呈していた。壁は北から南への傾斜地のために，北側は高く，南側は低くなっている。状態としては，やや内弯気味を呈し，壁面全体にわたって細礫を含み，ゴツゴツしていた。

床面は黄褐色土層のタタキで，わずかに凹凸がみられた。東壁の北半分から西壁へと幅5～10cm程，深さ数cmの周溝がまわっていた。主柱穴は4本と思われる。南側の2本は先に述べたような条件によって残存はしていない。

炉は中央よりやや北寄りに位置し，すりばち状にへこんだ炉であり，炉壁から炉底にかけて変成岩や粘板岩が集中して検出された。この石は焼石状になっており，これらの石の間に少量の焼土が

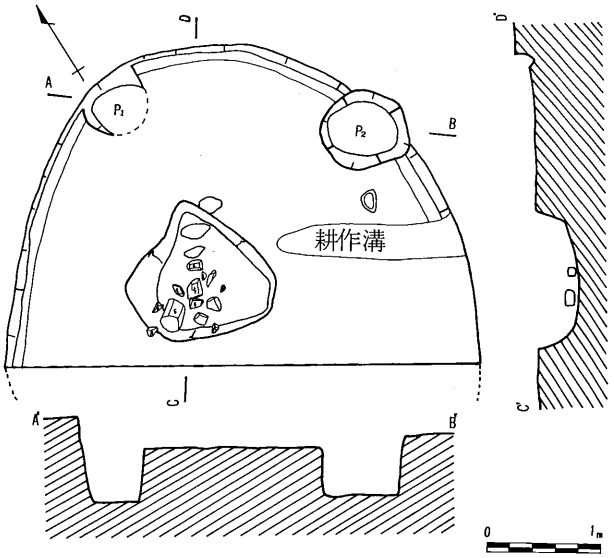
みられた。

遺物は勝坂期と加曽利E期の2種類が出土したが，本址は加曽利E期の住居址と思われる。

第2号住居址（第3図，図版3）

本址は東側で第21号住居址，西側で第3号住居址にはさまれたかっこうで発見され，東西4m55cm，南北（南側は桑による攪乱）で推定するに4m50cm程の規模を持ち，円形プランを呈する竪穴住居址である。壁は北側が高くて35cm，南側は残存している部分で数cmであった。壁面は細礫を含み，わずかに凹凸がみられた。床面は黄褐色のかたいタタキを呈し，大般水平であった。幅数cm，深さ同じく数cmの周溝が東壁の北半分から北壁を経て，さらに西壁の北半分まで回っていた。

柱穴は直径60cm前後規則的に配列されていた。炉は住居址の中央部附近に位置している。形状は石囲炉であり，現在は西側には炉石はないが，炉壁にみられるのが，構築当時に，それに用いられた石と思われる。炉石は花崗岩や緑泥岩が用いられ，赤く焼けて亀裂の入ったのも確認できた。炉底は若干すりばち状を呈し，焼土の堆積は少量であった。



第2図　第1号住居址実測図

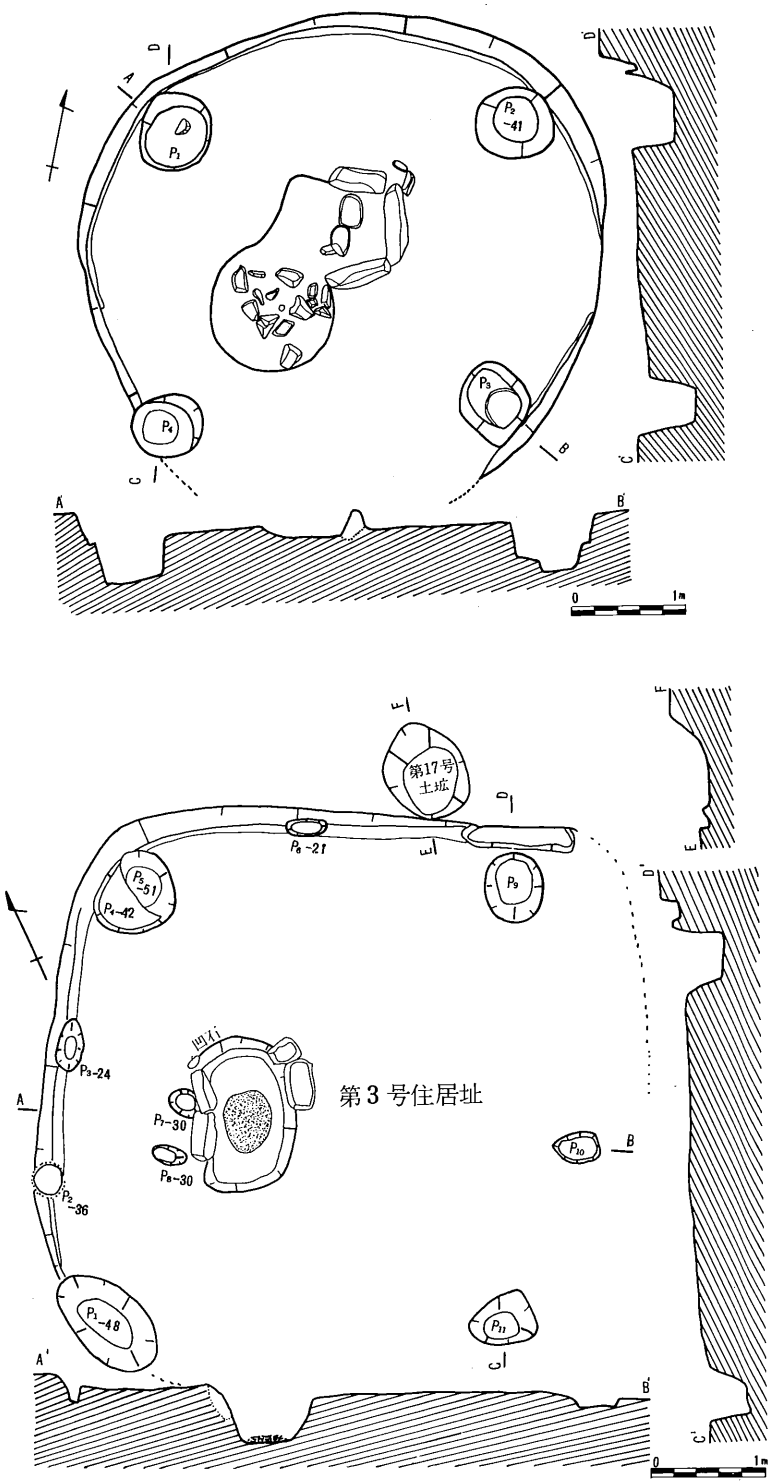
遺物は炉の南側に一面にわたって，床面より20cm程上ったレベルに多量の土器片の出土をみた。本址は加曽利E期の住居址と思われる。

第3号住居址（第3図，図版3）

第20号住居址と北西の一角で隣接して検出された。砂礫混りの黄褐色土層を掘り込み，円形プランを呈した竪穴住居址である。規模は東壁と南壁が桑の攪乱によって，その位置は把握できないが推定するに南北は5m20cm，東西5m20cm程，壁高は20cm～25cm程を測定できる。壁は北壁は外傾気味，西壁は内弯気味，壁面は細礫を含んでいた。床面は極めて良好なる叩きで，凹凸があった。周溝が北側から南側へと回っていた。その規模は幅10cm，深さは10～15cm程であった。

炉の位置は中央部よりやや西側にあり，構築時は石囲炉と思われるが，現在は3個の石が残っていた。石は緑泥岩や花崗岩で占めてあり，西側のそれはわれてはいたが，大きな一枚石であった。炉石の内面には炭化物の附着が多く，炉底には多量の焼土の検出をみた。炉の断面はすりばち状になっていた。

本址は加曽利E期の住居址と思われる。



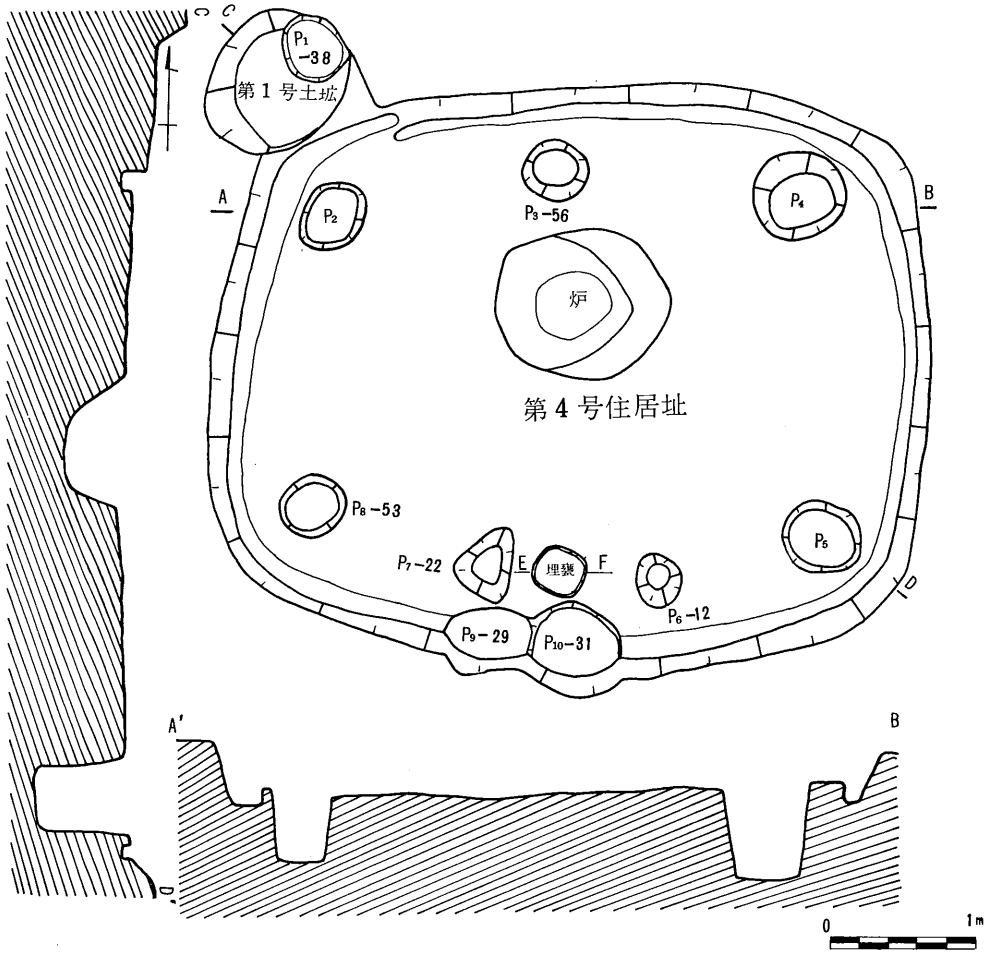
第3図　第2号（上）・3号住居址・第17号土坑（下）実測図

第4号住居址（第4～5図，図版4）

本址は北側で第1号土坑と接するような位置に発見された。南北4m20cm程，東西4m95cm程の方形状に近い円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は北西が高く，南は低い。状態はやや内弯気味で，タタキ状はない。壁面全体にわたって細礫を含み，わずかな凹凸が認められた。床面は黄褐色土のかたい叩きで，わずかに凹凸があった。床面より20～30cm程高い面に浮いた状態で無数の拳大程の石がならんでいた。幅10～20cm程の周溝が全周していた。

主柱穴は5本と思われ，それはP_2，P_3，P_3，P_5，P_8であった。配列状態は5本がほぼ等間隔に穿けてあり，模範的な配列と考えてよかろう。炉は中央よりやや北側の位置にあり，南北1m2cm東西1m20cm程の規模を有し，凹み状の落ち込みになっていた。内部より焼土が少量検出された。

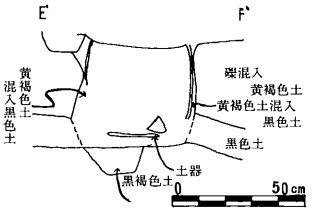
埋甕の出土状態は南壁の中央部に近く，また東西の中心線上に位置し，正位の状態であった。土器は下半分は欠損してしまって，わずかに散在している程度だった。本住号址は埋甕の土器からして加曽利E期のものと思われる。



第4図　第4号住居址及び第1号土坑実測図

第5号住居址（第6～7図，図版4）

本址は北側では第6号住居址，第7号住居址，西側では第4号住居址，南側では第14号住居址，第9号住居址に囲まれた位置に検出された。本址の規模は南北4m75cm，東西3m80cm程の長円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は北，西が高く，全般的に外傾が強く，軟弱であった。



第5図
第4号住居址埋甕断面図

床面は黄褐色土のかたいタタキではあるが，わずかに凹凸が認められた。主柱穴は4～5本と思われ，それらの周囲に数個の補助穴が認められた。炉は住居址の中央部に位置し，南北50cm，東西50cm程の規模を持っていた。炉の中央部には正位に甕を埋めており，その周囲に拳大程の花崗岩を8個，土器の口縁部に沿って丁寧に配列してあった。この甕は胴部以下は欠損していた。本址は埋甕炉の土器からして縄文中期初頭の住居址と思われる。

第6号住居址（第8図，図版5）

本址は南側では第5号住居址，北側は第8号住居址，第13号住居址に近接して検出された住居址である。さらに，外側の第2号住居址を切って構築されている。南北3m10cm程，東西3m50cm程の規模で円形プランを呈する竪穴住居址であった。壁高は15cm～30cm位の範囲内に著しく外傾している。さらに，西壁には大きな凹凸が認められた。

床面は黄褐色土層のかたいタタキで，ほぼ水平となっていた。主柱穴はP_4，P_6，P_5，P_{14}などの割合に小さ目のものが該当すると思われる。

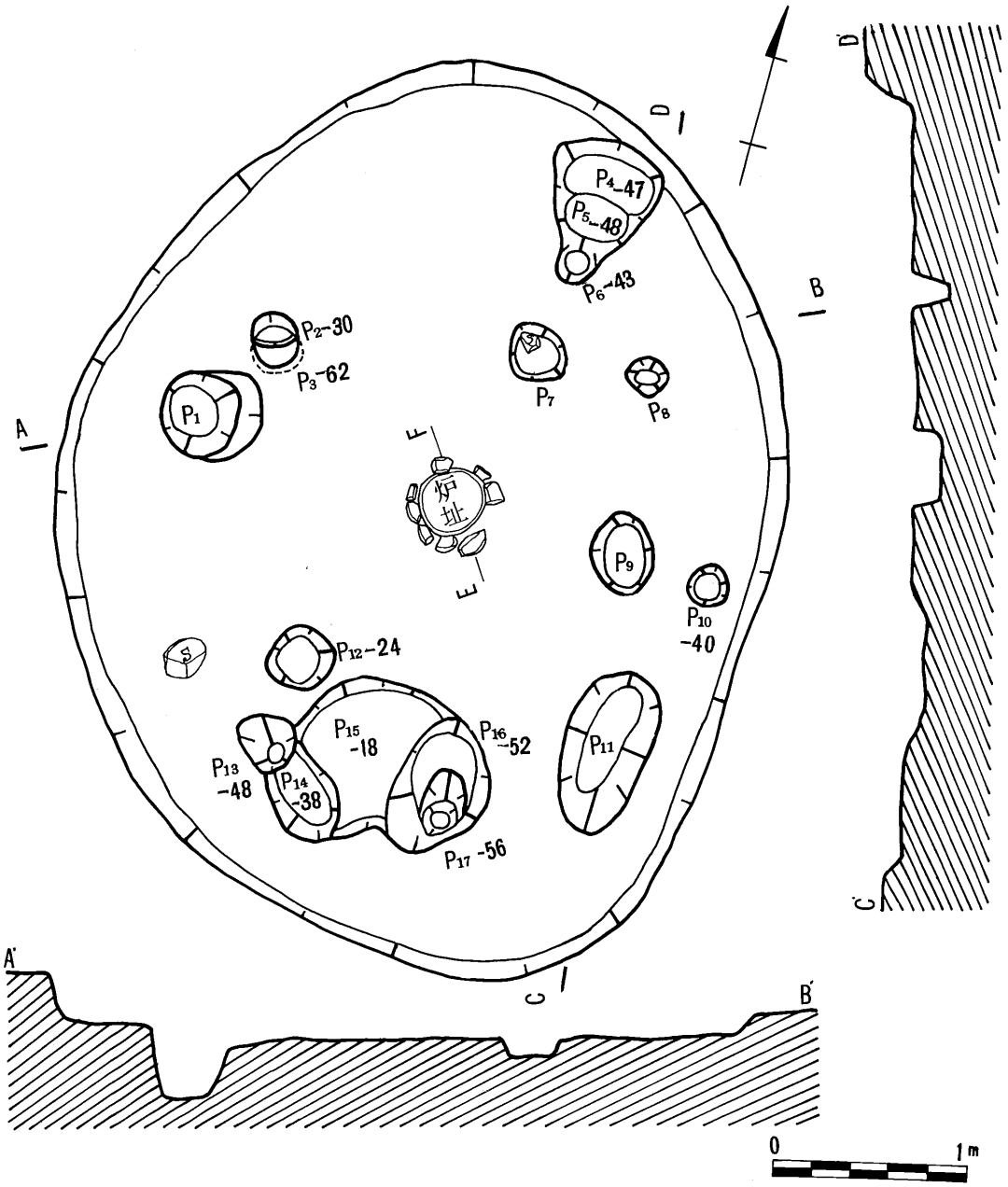
炉は住居址の中心位置よりやや西寄りに存在し，南北35cm程，東西30cm程の規模を持つ方形の石囲炉であって，焼土の存在はわずかに認められた程度にとどまった。本址は炉の形態からして縄文中期中葉の住居址と思われる。

第7号住居址（第8図，図版5）

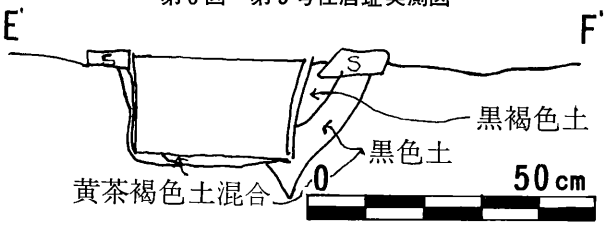
本址は発掘された住居址のなかでは，切り合い関係が明瞭とした竪穴住居址であり，内容的には第6号住居址に切られている。その範囲はI5，J5，I6，J6，K6，I7，J7，K7，I8，J8，K8の11グリットに及んでいる。南北4m30cm，東西4m80cm程の大きさを持ち，平面プランは円形状を呈している。

壁高は数cmから10数cmに及び，内弯が強くなっている。壁面には細礫がかなりの量で充満していた。床面は黄褐色土層のかたいタタキであり，極端に凹凸の顕著な跡がみられた。柱穴は大き目のが主柱穴と考えられ，そのようなものはP_{10}，P_{19}であった。

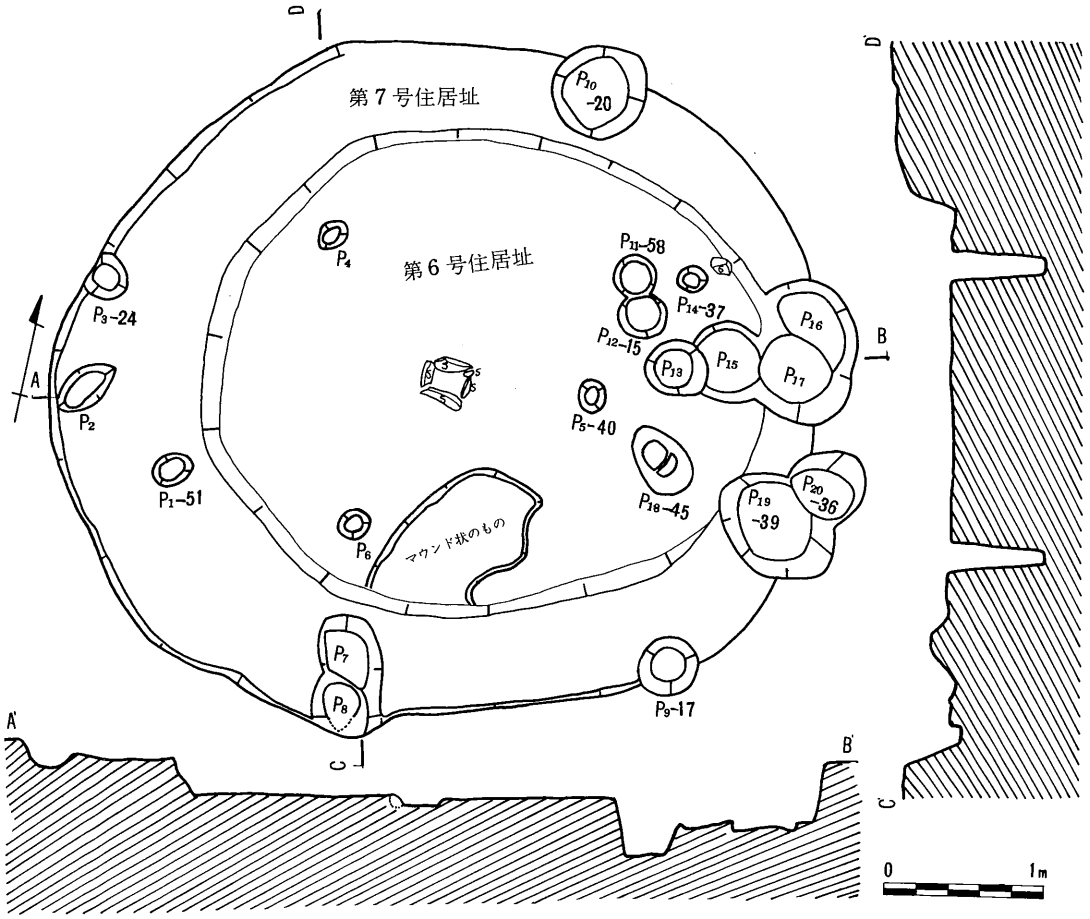
炉やその他，住居址の附属的なものは切り合い関係の際に破壊された傾向が強いように思われる遺物は，縄文中期初頭土器片があり，したがって本址は同時期の住居址と思われる。



第6図　第5号住居址実測図



第7図　第5号住居址炉址断面図



第 8 図　第6号・7号住居址実測図

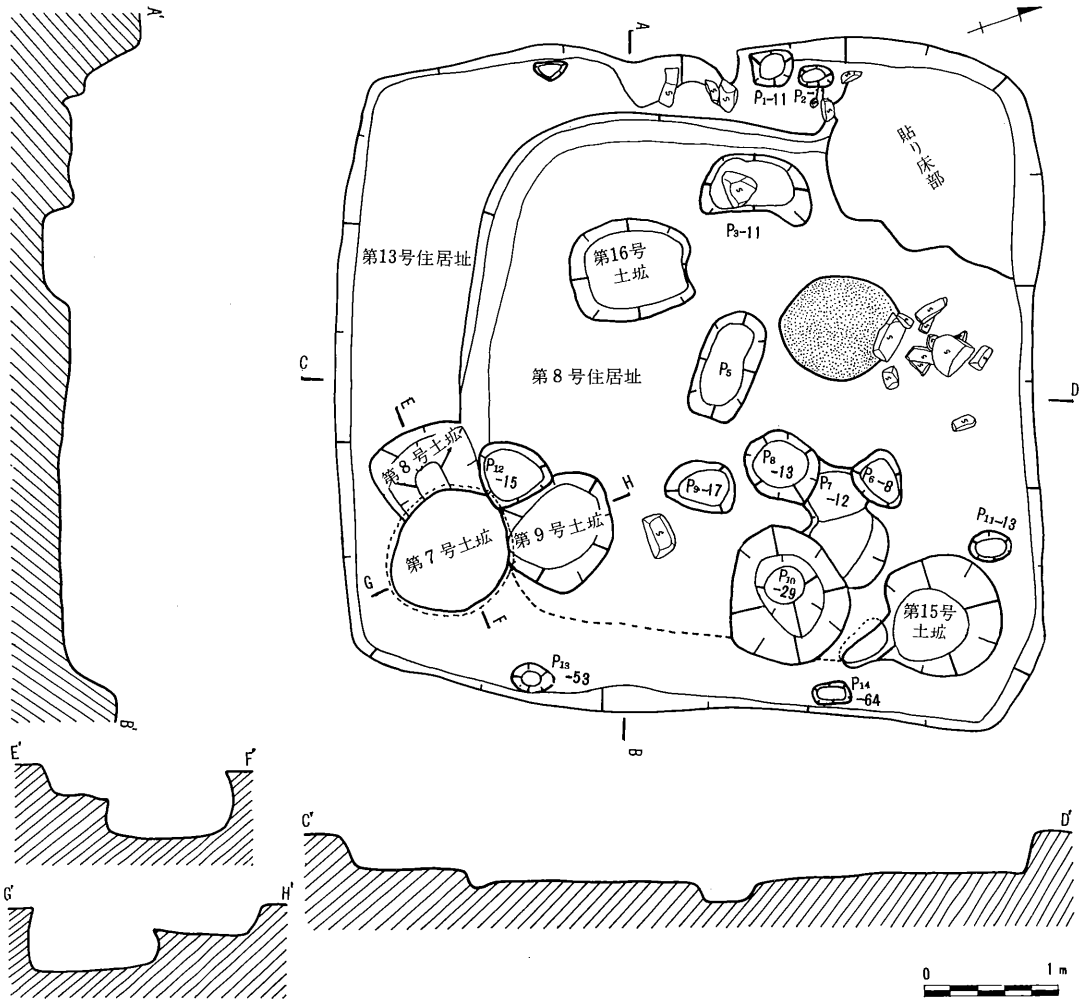
第8号住居址（第 9 図，図版 5）

本址は，発掘した遺構中，最北部に，第13号住居址を切った状態で検出された。南北 4m30cm，東西 3m95cm 程の隅丸方形プランの竪穴住居址で，黄褐色土層を掘り込んでいる。壁高は 30cm前後を測定でき，外傾や内弯をし，かたく叩かれていた。

床面はかたいタタキになっており，割合に凹凸が顕著となっていた。柱穴は第13号住居址及びその他の土坑との複雑な切り合い関係のためにはっきりとしたものは把握できなかった。西側から南側の壁面直下に浅くて幅広の周溝が回わっていた。

切り合い関係では北壁は第 13 号住居址と併用，南壁は明らかに第 13 号住居址を切る。東壁は不明なために切り合い箇所は判然としない。

カマドは北壁にあり，石組粘土カマドであり，保存状態は割合に良好であった。カマドに使用された石の大きさは多種多様であり，また，石質も花崗岩，緑泥岩，粘板岩と近くに産する石を使用してあった。遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器，鉄鏃が出土した。したがって本址は平安時代の住居址と思われる。



第 9 図　第8号・13号住居址・第7号・8号・9号・15号・16号土坑実測図

第9号住居址（第11～12図，図版6）

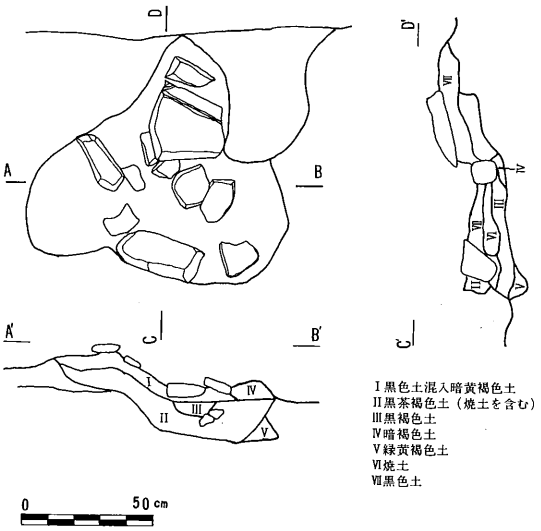
本址は近隣では北東で第5号住居址，南東で第10号住居址，北西で第4号住居址，南西で第1号住居址に囲まれており，さらに，北側では第14号住居址を切り，東側で第10号住居址に切られている。南側は桑の根の攪乱によって破壊が著しい。その規模は東西4m75cm，南北（推定による）4m50cm程を算出できる。平面プランは円形を呈している竪穴住居址である。壁高は10cm内外であり，状態は著しく外傾や内弯している。

床面は極めて良好なる黄褐色土層の叩きであり，大般水平であるが，あばた状の凹凸が認められた。柱穴は構築当時は4本あったと推定できそうであるが，南側は前述したような事により残存せず，現在は北側の2本が残っている。それはP_6，P_8であり，P_6は若干袋状を呈する。

炉は中央部より西側寄りに位置しており，南北1m35cm，東西1m20cm程の規模ですりばち状に

なっている。北側から東側の炉壁には拳大程の石がみられた。焼土は炉底にわずかに集中して検出された。

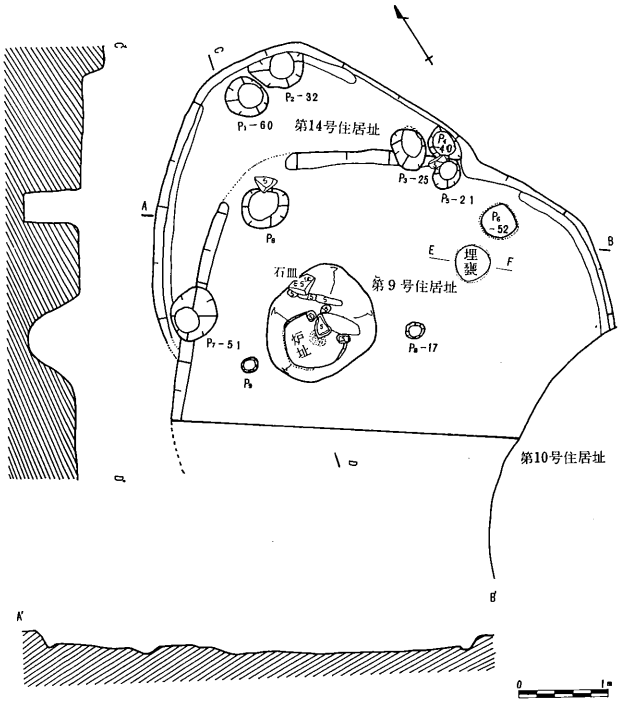
遺物は東壁の内側へ寄った位置に正位で埋甕がみられた。保存状況は口縁部から胴部にかけては見事に出土したが，胴下半分部から底部は欠損しており，一般的にみられる埋甕出土状況と類似していた。よって，本址は加曽利E期の住居址と思われる。



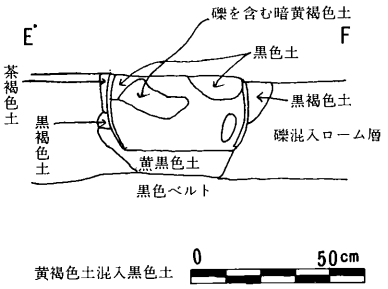
第10図　第8号住居址カマド実測図

第10号住居址（第13図，図版6）

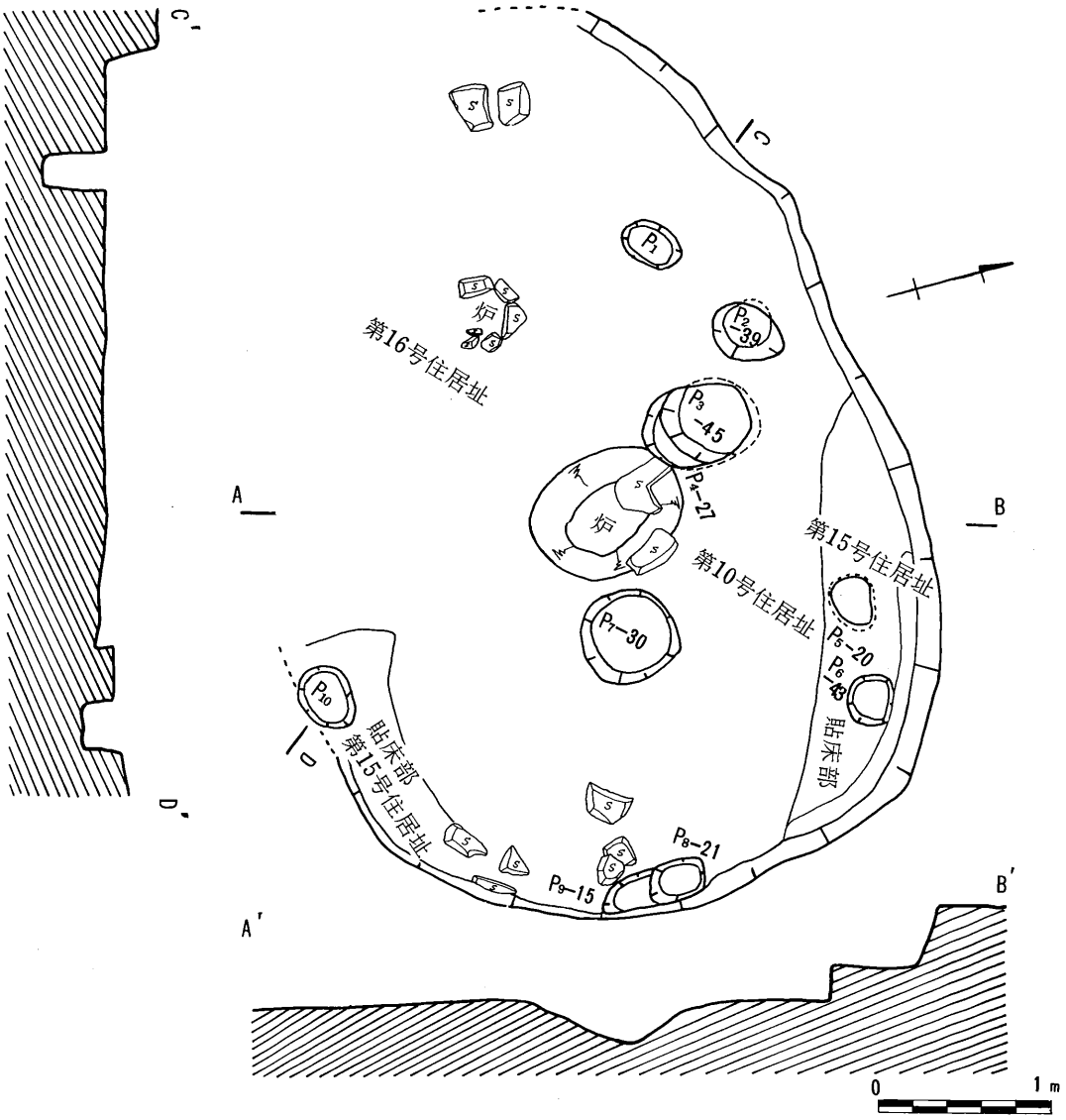
本址の上面には貼床状になっている第15号住居址の床面が北側と南側に存在し，西側は第16号住居址に切られている。プランはっきりしないが，推定円形と思われる。壁高は数cmから25cm程あり，内弯がやや認められる。床面はわずかなタタキになっており，凹凸がややあった。柱穴はP_2，P_{10}，P_8のあたりと思われる。P_3は断面袋状を呈しており，貯蔵穴と思われる。炉は南北90cm，東西75cm程の規模，すりばち状を呈し，炉壁は割合に急傾斜をなしている。遺物は，中期全般にわたって出土したが，本址は縄文中期後葉のものと思われる。



第11図　第9号・14号住居址実測図



第12図　第9号住居址埋甕断面図



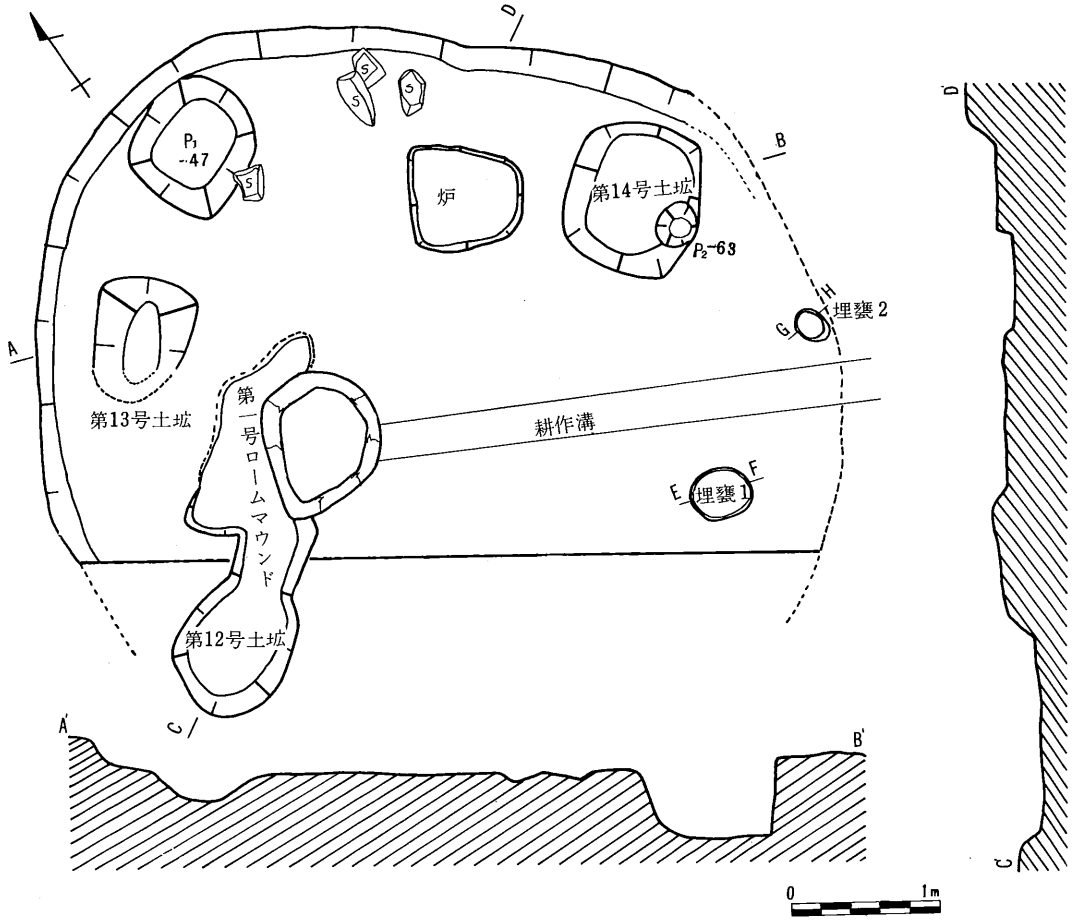
第13図　第10・15・16号住居址実測図

第11号住居址　（第14～16図，図版7）

本址は発掘地区の南側の位置に，発見された縄文中期後葉の竪穴住居址である。東壁近くには第14号土坑，西壁近くでは第13号土坑，南側は第12号土坑にそれぞれ切られている。形状は黄褐色土層を掘り込み，東壁と南壁は攪乱によって破壊されてしまっているが，推定するに南北4m80cm，東西5m40cm程の規模で，円形プランを呈し，壁高は残存している個所では20～30cmを測定でき内弯は顕著で，軟弱であった。主柱穴は攪乱によってはっきりしない箇所が多かったが，P_2だけは主柱穴と考えるのにふさわしい。

床面は黄褐色土のかたいタタキであり，凹凸が顕著であった。炉は北側にあり，わずかに凹み状になっており，そのほかに若干焼土の検出をみた。地床炉の形態をとっていた。

埋甕は2カ所発見され，No1のは正位の状態で出土し，ほぼ完型であった。No.2のは正位であったが，大部分こわれていた。本址は加曽利E期と思われる。



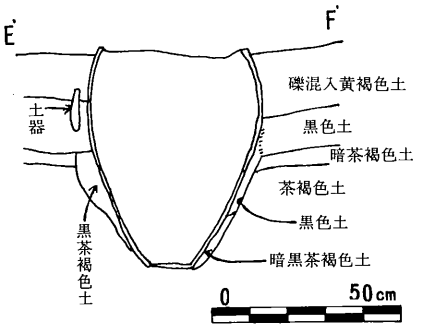
第14図　第11号住居址，第12～14号土坑，第1号ロームマウンド実測図

第12号住居址（第17図，図版7）

本址は東側では第18号住居址，第22号住居址，南側で第11号住居址にはさまれて検出された。黄褐色土層面を掘り込み，南北4m40cm，東西では東壁は現在残存しないが，構築当時は推定ではあるが4m50cm前後あったものと思われる。そのプランは円形であった。

壁の掘り込みは数cmであり，やや外傾気味であった。床面は黄褐色土層面のかたいタタキで，大般水平であった。主柱穴と思われるのは，P_2，P_7，P_9，P_4であろう。

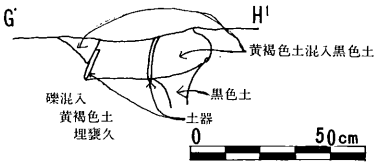
炉は住居址の中央部附近にあり，小さな石囲炉と思われるが，西側と北側は石が抜きとられていた。南側の近



第15図　第11号住居址埋甕1断面図

くに焼土が堆積していた。

遺物は加曽利E期のものが多かった。



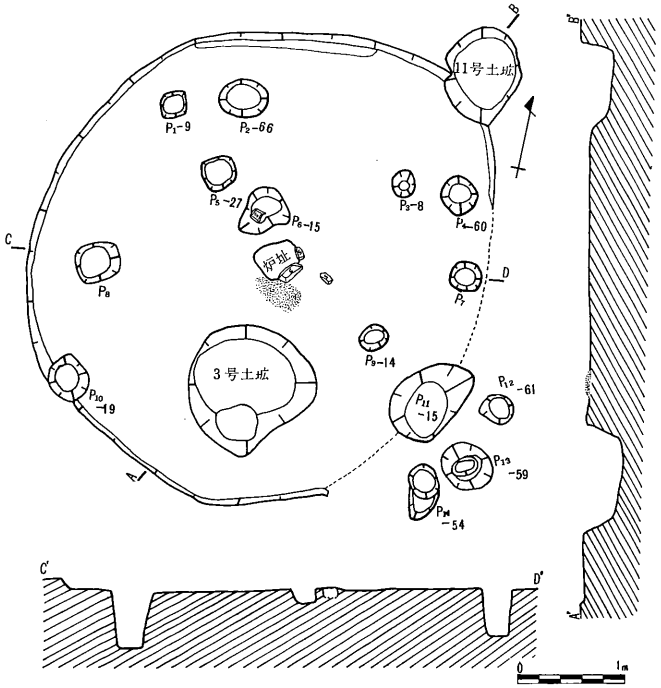
第16図　第11号住居址埋甕2断面図

第13号住居址（第9図・18図，図版5）

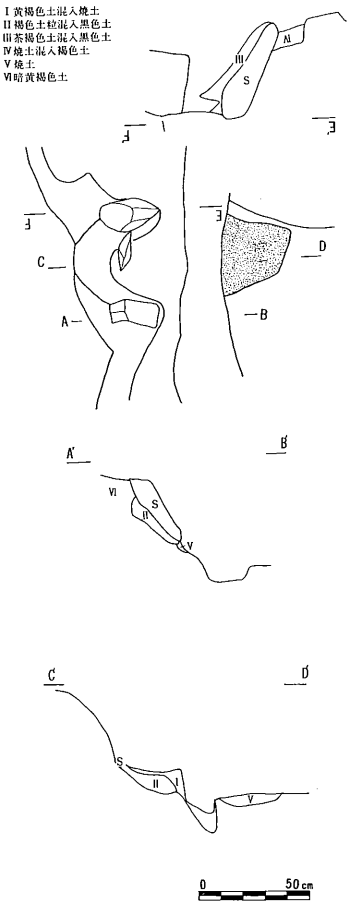
本址は第8号住居址で南側と西側で切られている。南北5m30cm程，東西5m程の隅丸方形プランの竪穴住居址で，黄褐色土層を掘り込んである。壁は25cmから40cmの範囲に含まれ，幾分，内弯気味にできている。さらに壁面自体には凹凸が顕著であった。

床面はローム層の叩きであり，その硬さはカマド周辺では良好，他は軟弱であった。柱穴は明瞭としなかった。カマドは西壁中央部に位置し，石組粘土カマドで，双方に花崗岩の自然石を規則正しく配列し，くずれないように両面にわたって粘土をはりつけてあった。花崗岩はよほど火をうけたとみえてボロボロの状態であった。

遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器片が出土した。したがって本址は平安時代の住居址と思われる。



第17図　第12号住居址，第3号土坑，第11号土坑実測図



第18図　第13号住居址カマド実測図

第14号住居址（第11図，図版6）

本址は南側では大部分，第9号住居址に切られてしまっている。規模については南北では切り合い関係のために不明，東西では3m50cm程を測る。プランは円形の竪穴住居址である。

北壁は25cm程で，やや外傾気味であった。床面は黄褐色土

層中に設けられ，極めて軟弱であった。炉は現在の段階ではなかった。主柱穴となり得るのは，P_1 P_7 であった。本址は加曽利E期の住居址と思われる。

第15号住居址（第13図，図版6）

本址は第10号住居址を掘り下げていく段階で北壁と南壁の一角に貼床部分が発見されたので，これを第15号住居址とした。北壁の一角にはわずかに周溝が回り，住居址としての様相を備えていた壁面は凹凸があり，軟弱であった。床面は良好なる貼床であったが，わずかに凹凸が認められた。

本址は加曽利E期の住居址と思われる。

第16号住居址（第13図，図版6）

本址は第10号住居址を切っており，南側，西側は桑の攪乱によって見る影もない。規模は不明，プランは推定するに円形の竪穴住居址と思われる。壁は軟弱であって，わずかに外傾していた。床面は大体水平でかたいタタキになっていた。

炉は小さな石をあつめて構築してあり，それ自体焼けていた。本址は加曽利E期と思われる。

第17号住居址（第19～20図，図版8）

本址はJ15～L15，J16～L16のグリット内にかけて検出され，東側で第23号住居址を切っている。黄褐色土層を基盤とする南北3m65cm，東西4m30cm程の隅丸方形プランの竪穴住居址である北壁の上面はでこぼこが大きかった。基盤が北西から南東への傾斜のために，北壁は高くて60cm位あり，内弯気味を呈していた。

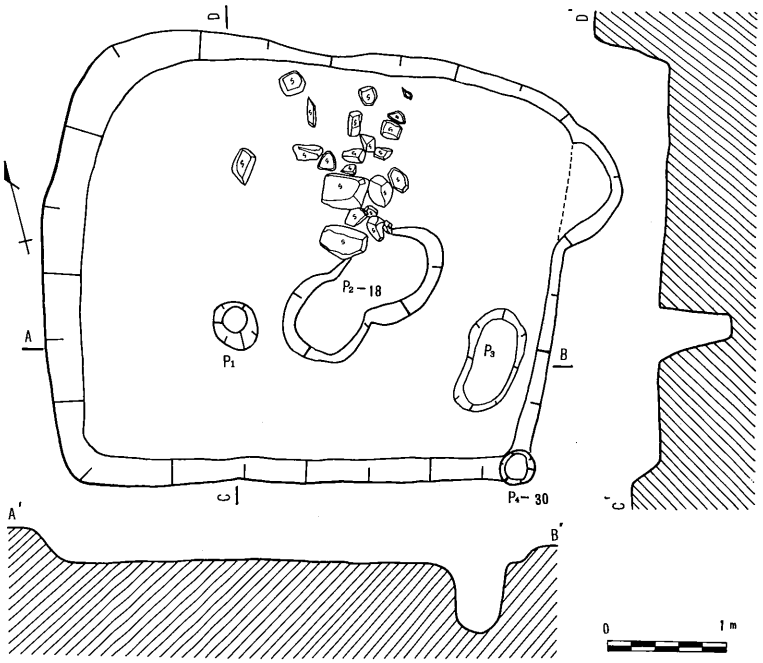
床面は黄褐色土層の叩きで，多少の凹凸がある。両袖の外側に粘土を貼り付けてあった。石組は煙道に近い方にも配列されていた。柱穴は P_1，P_3，P_4 と発見されたが，そのわりには配列が不規則であった。

遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器片が出土した。遺物より本址は平安時代の住居址と思われる。

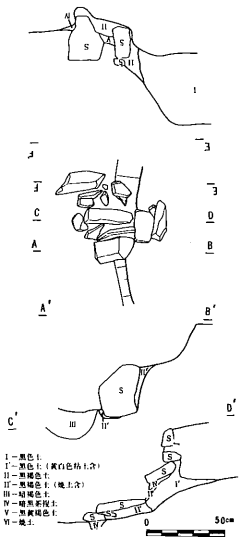
第18号住居址（第21図，図版8）

本址は北側で第22号住居址を切った状態で発見された。砂礫混りの黄褐色土層を掘り込んで構築してある。その規模は南北4m75cm，東西4m50cm程を測定でき，そのプランは円形である。周構は壁面直下を全周していた。壁高は10～40cm程あり，外傾が顕著であった。壁面には多くの凹凸が認められ，やや軟弱であった。床面は黄褐色土層中に設けられ，かたくたたいてあり，ほぼ水平であった。

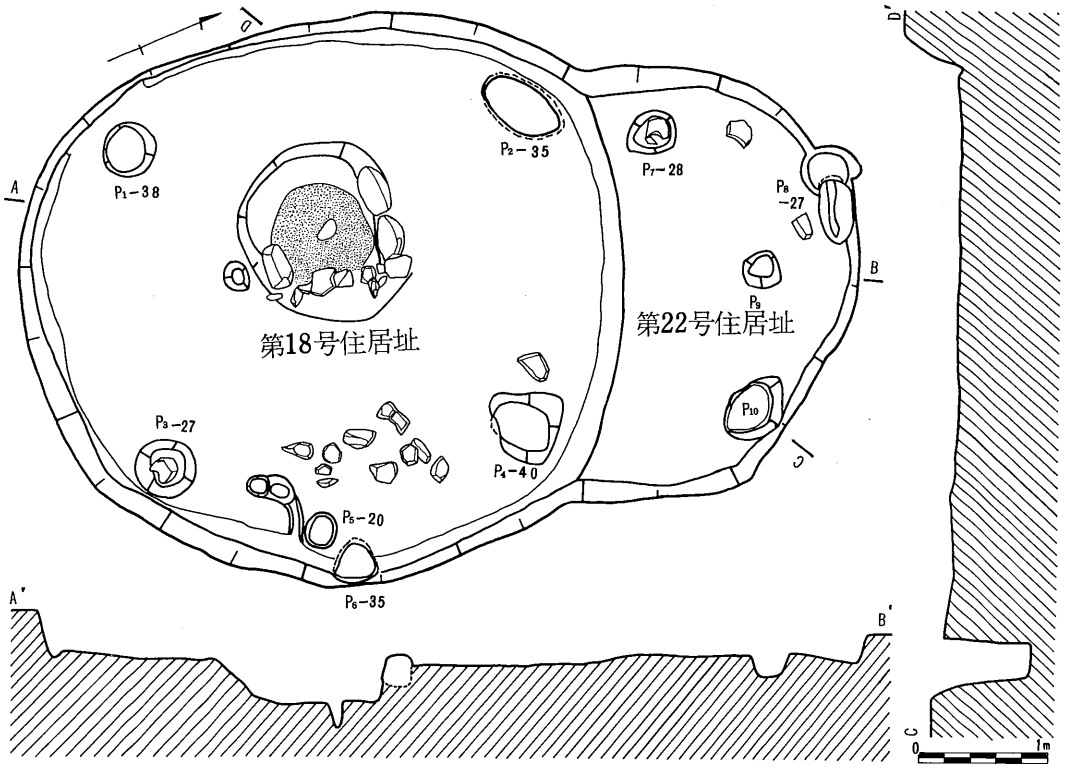
主柱穴は4本と思われ，規則正しく配列されていた。主柱穴のなかには P_2 のように断面袋状，P_3 のように石を持ったものなども含まれていた。炉は住居址の中央部よりやや北側あり方形の石囲炉であり，石のないところは石が抜けた跡があった。炉の断面はすりばち状になっており，炉底には焼土が充満していた。遺物は加曽利E期のものが多かった。



第19図　第17号住居址実測図



第20図　第17号住居址カマド実測図

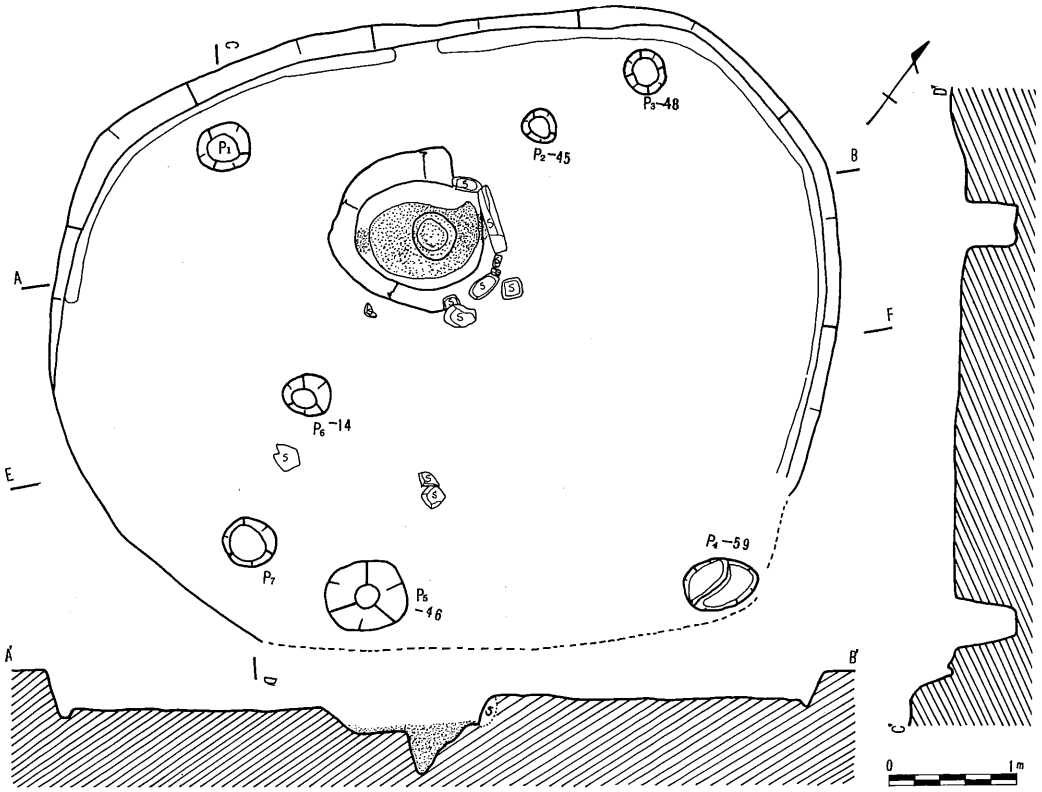


第21図　第18号・22号住居址実測図

第19号住居址（第22図，図版9）

本址は東側で第20号住居址に切られ，さらに桑の根の攪乱等によって破壊されてしまって壁の残っていない所があった。表土面より40cm位下った砂礫混合の黄褐色土層を掘り込んだ竪穴住居址であって，その規模は南北6m，東西（推定により）4m90cm程を測定できる。壁高は数cmから30cm程あり，状態としては全般的に外傾が強い。さらに壁面の各所にわたって細礫が露出していた。

柱穴は全部で7本検出されたが，そのなかで主柱穴は4本と思われ，それはP_1，P_3，P_4，P_7である。床面は黄褐色土曽のかたいタタキで，わずかに凹凸が認められた。炉は住居址の中央部よりやや北側に位置し，南北1m30cm，東西1m20cmの規模の円形状石囲炉である。ただし，現在は北東の石だけしか残存していないが，構築当時は他の方にも石を置いてあったことがうかがわれる凹みがみつかった。炉壁下部から炉底にかけて多量の焼土が検出された。北半分の床面に周溝が回っていた。遺物は加曽利E期のものが多いように思われた。

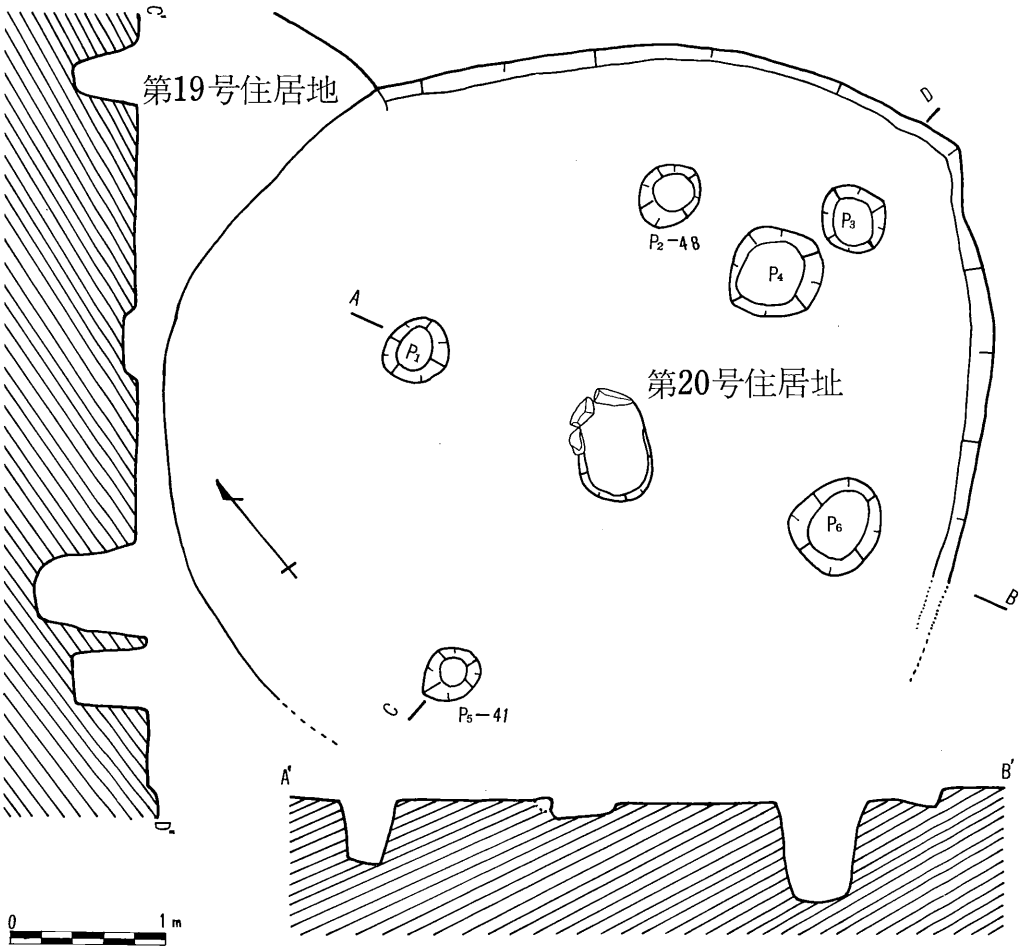


第22図　第19号住居址実測図

第20号住居址（第23図，図版9）

本址は東壁で第19号住居址を切って発見された。南側は桑の攪乱によって壁の位置は把握できなかった。規模は南北（推定により）4m80cm，東西5m35cm程を測定でき，円形プランを呈する竪穴住居址であって，壁高は数cmで，壁面には細礫が露出している。

床面は黄褐色土層の叩きで，炉を中心とした附近は硬く，他は軟弱であった。炉は住居址の中心部よりやや南側によった位置にあり，円形の石囲炉であった。炉石は北側のみ残存していたにすぎなかった。炉底は床面よりわずかに凹んでいた程度であり，焼土はわずかにみられた程度であった。主柱穴は P_1，P_2，P_6，P_5 の4本であった。遺物は縄文中期全般にわたってはいるが，本址は縄文中期後葉の住居址と思われる。



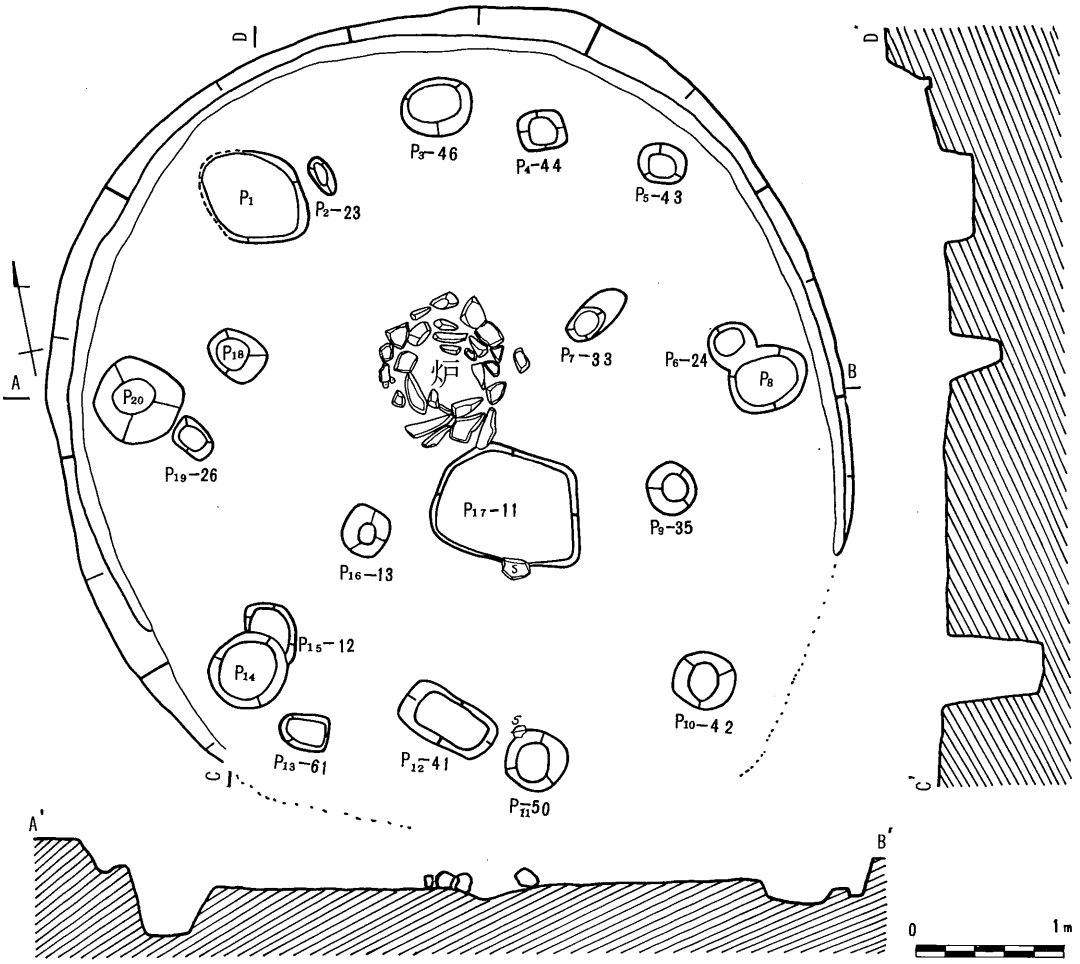
第23図　第20号住居址実測図

第21号住居址（第24図，図版10）

本址は発掘された遺構中では最東部に位置していた。南側は基盤の傾斜，あるいは桑の根の攪乱等によって残存しておらず，規模は南北では推定するに5m50cm前後，東西では5m30cm位の円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は北側では30cm，西側25cm，東側は25cm程をそれぞれ計え，状態は軟弱であり，また，多数の凹凸も認められた。床面は砂礫混合の黄褐色土層中に構築され，大般水平であったが，軟弱な状態を呈していた。周溝が東壁から北壁を経て西壁へと回っていた。柱穴は主柱穴と補助穴が複雑にあけられていた。炉は南北1m5cm，東西85cm程の規模を持っ

た円形の石囲炉である。この炉は一般的にみられるのとは異って拳大程の石を3重に大般同心円状に配列してあった。炉底の焼土は微量であった。

本址は加曽利E期の住居址と思われる。



第24図　第21号住居址実測図

第22号住居址（第21図，図版8）

本址は南側で第18号住居址によって切られてしまっているために南北の規模は不明である。東西のそれは3m30cm程で円形プランを呈する竪穴住居址である。北壁は25cm位であってやや内弯気味を呈し，軟弱気味である。床面は大般水平で，軟弱気味であった。柱穴は構築当時は6本の主柱穴と思われたが切り合い関係のために現在は北側の3本が存在しているだけである。炉は構築当時はあったものと思われるが，現在はない。

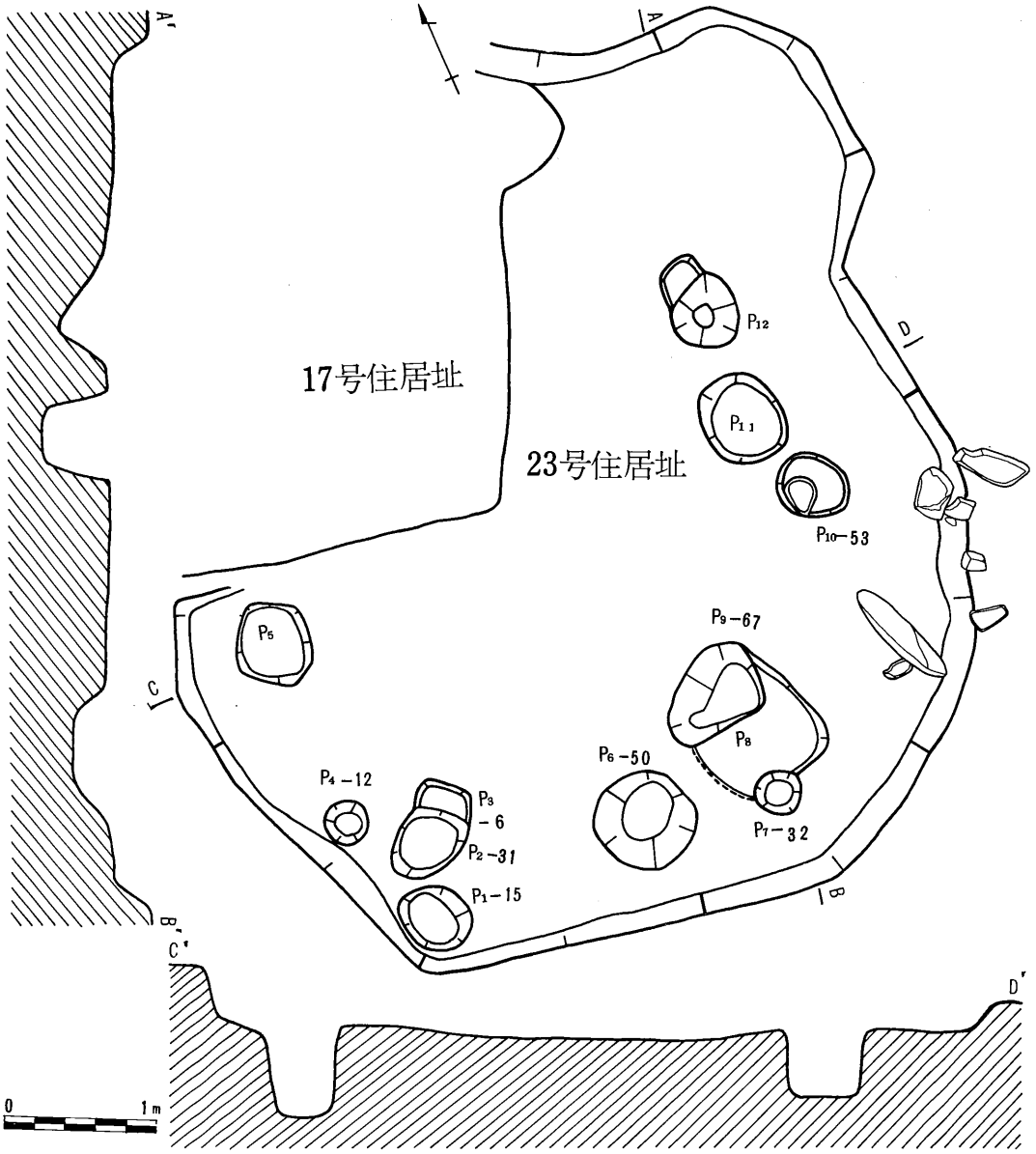
本址は加曽利E期の住居址と思われる。

第23号住居址（第25図，図版8）

本址の西側は第17号住居址を切り，その規模は南北6m，東西は西側が切られているために不明壁高は20～30cm程あり，内弯が強い，壁面は軟弱気味である。床面は大般水平ではあるが軟弱気味であった。炉は構築時はあったと思われるが切り合いの際に破壊されたものと思われる。

柱穴は何本もあるが主柱穴となり得るのはP_5，P_6，P_{11}であろう。もう1本は西側にあったと思われるが切り合いの折に破壊された模様であろう。

本址は加曽利E期の住居址と思われる。（飯塚政美）



第25図　第23号住居址実測図

第2節　土　　坑

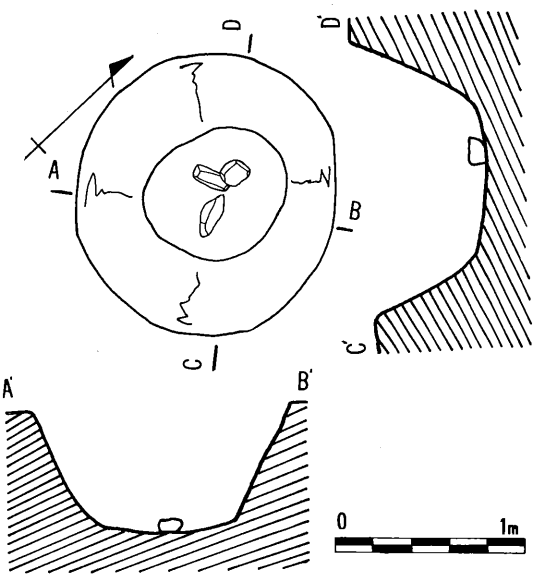
第1号土坑（第4図，図版4）

第1号住居址の北西の隅の壁に接して発見された土坑である。黄褐色土層を掘り込み，南北1m東西95cm程の規模を持ち，円形プランを呈している。壁高は20数cm前後を実測でき，状態は内弯している。壁面は凹凸が顕著である。床面は人為的なタタキはなく，中央部が若干高くなっていた。遺物は，何も出土しなかった。

第2号土坑（第26図・図版10）

第10号住居址の東側に単独に発見された土坑である。黄褐色土層を掘り込み，築かれた土坑で，南北1m50cm，東西1m35cm程で，プランは円形を呈している。壁高は70cm前後を測定でき，壁面の状態は外傾が強く，ところどころで凹凸が認められた。

床面は礫層に近い面に達しており，中央部がやや低くなっていた。遺物は加曽利E



第26図　第2号土坑実測図

第3号土坑（第17図，図版7）

発掘地区の第12号住居址内の南側に検出された土坑である。黄褐色土層を掘り込み構築され，その規模は南北1m20cm，東西1m20cmで，東側は若干角張った円形状プランを呈している。壁高は40cm前後計測が可能で，状態は外傾気味を呈していた。床面はわずかな叩きになっており多少の凹凸が認められた。遺物は，何も出土しなかった。

第4号土坑（第27図）

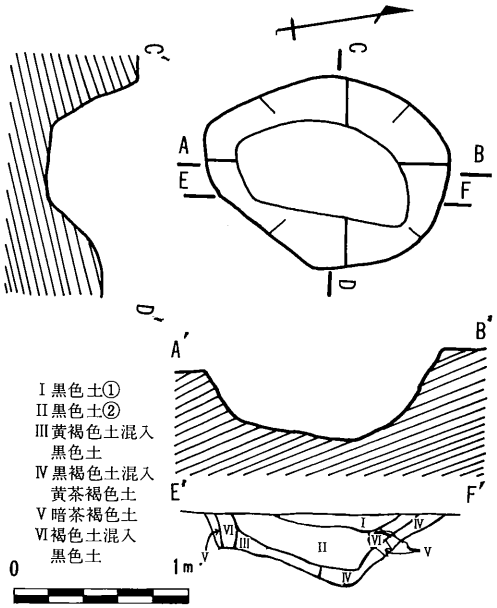
本土坑は西側では第5号住居址，東側では第12住居址にはさまれた位置に発見された。南北1m40cm，東西1m10cm程の円形プランを呈し，深さは50～60cm前後あった。状態は全般的に外傾や内弯が強く，壁面の凹凸がかなり認められた。床面はかたくたたかれてはいたが，凹凸の個所が多数存在していた。

遺物は，黒耀石の原石が出土した。

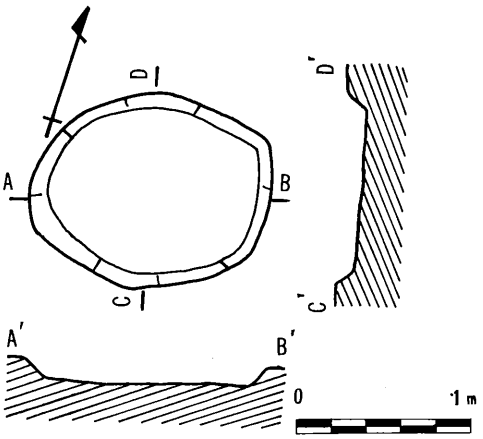
第5号土坑（第28図，図版11）

本土坑は第7号住居址の南側に検出された土坑であって，I7，I8の2つのグリットにまたがっている。平面プランは不整な円形を呈しており，規模は長・短軸1m40cm×1m15cm，深さ12cmを計

る。砂礫混合の黄褐色土層を基盤として掘り込んであり，壁面は外頃がかっていた。床面は若干の凹凸があり，かたくしまっていた。遺物は，何も出土しなかった。



第27図　第4号土坑実測図



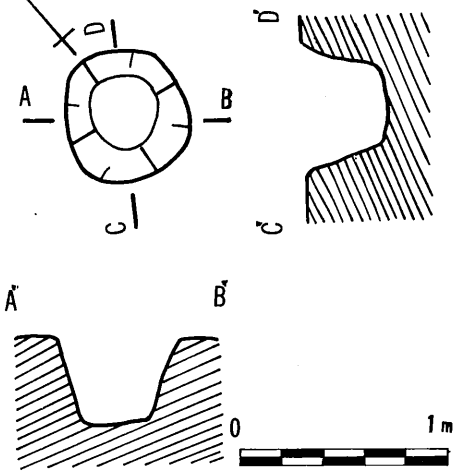
第28図　第5号土坑実測図

第6号土坑（第29図）

本土坑はI10のグリットに発見され，第22号住居址の西側に位置している。平面プランは円形を呈し，規模は南北65cm，東西60cm程で，深さは35cmを計る。砂礫混入の黄褐色土を掘り込んでおり，覆土は上面では黒褐色土，下面は茶褐色土であった。壁はやや内弯し，その壁面には小礫が入っており，そのために凹凸のある壁面となっている。

床面も小礫が混入しており，凹凸がいくらかある

遺物は勝坂式



第29図　第6号土坑実測図

第7号土坑（第9図，図版5）

本土坑は第13号住居址の南壁近くに，床面を掘り込んで構築された土坑である。平面プランは円形を呈しており，規模は南北1m，東西95cm，深さ25～50cm，程を計る。礫を含む黄褐色土層を基盤として掘り込んでおり，覆土は黒褐色土をしている。壁面は断面袋状を呈している。

床面は中央部へ行くに従って，若干低くなっている。

遺物は，何も出土しなかった。

第8号土坑（第 9 図，図版5）

本土坑は東側で第7号土坑に切られ，方形状の平面プランを呈する土坑である。規模は南北75cm東西は推定で構築当時70cm程，深さは20cm程を計る。砂礫混りの黄褐色土を掘り込み，覆土は黒色土，壁は外傾，床面は若干の凹凸がある。

遺物は，何も出土しなかった。

第9号土坑（第 9 図，図版5）

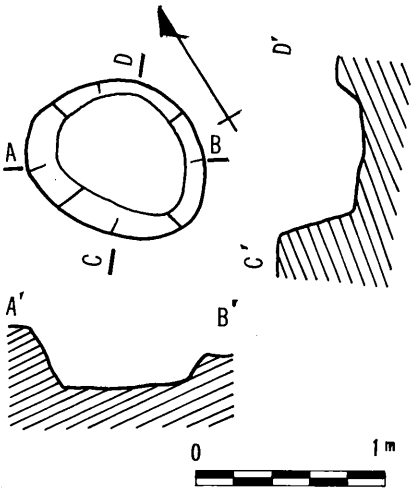
本土坑は第17号土坑と接して発見され，円形を呈するプランで，規模は85cm×90cm，深さ20cm位を計り，覆土は黒褐色土，壁は外傾し，床面は壁沿いが若干高くなっている。

遺物は，何も出土しなかった。

第10号土坑（第30図）

本土坑は第22号住居址の北西の位置にあり，円形の平面プランを呈し，規模は85cm×95cm程，深さ15～32cm，黒褐色土の覆土である。壁は外傾し，壁面の中段に段がある。床面はかたいたたきがあり，凹凸が顕著であった。

遺物は，勝坂式。



第30図　第10号土坑実測図

第11号土坑（第17図，図版7）

本土坑は北東の位置に，第12号住居址の壁面の一部を切って構築されている。平面プランは円形に近い形を呈しており，規模は南北90cm，東西75cm，深さ25cmを計る。覆土は礫混じりの黒褐色土で，砂混りの黄褐色土を掘り込んでいる。

壁は北壁は内弯し，南壁は外傾し，床面はやや固めてあるが，若干の凹凸がみられる。

遺物は，何も出土しなかった。

第12号土坑（第14図，図版7）

本土坑は第11号住居址の南側に発見されたもので，桑の攪乱が一部に入っていた。規模は南北 1 m10cm，東西80cm程を計る。北壁は第1号ロームマウンドの溝と接している。砂礫混りの黄褐色土を掘り込み，覆土は黒褐色土。

壁は外傾が強く，壁面に細礫が露出している。床面はかたいタタキであり，わずかに凹凸が認められた。遺物は，何も出土しなかった。

第13号土坑（第14図，図版7）

本土坑は第11号住居址の床面を掘り込んで西側に構築された土坑である。平面プランは北側が若干角張ってはいるが，全般的には円形状を呈している。規模は南北は推定であるが90cm，東西は65cm，深さ20cmを計り，覆土は黒褐色土であった。砂礫混りの黄褐色土層を掘り込み，壁はやや内弯し，壁面には小礫が混入していた。遺物は，何も出土しなかった。

床面はかたいタタキになっており，中央部が若干低くなっていた。

第14号土坑（第14図，図版7）

本土坑は北東の床面の一部，砂礫混入の黄褐色土層面を掘り込んで構築した土坑である。平面プランは四隅は若干角張ってはいるが，全般的には円形状を呈し，規模は南北1m5cm，東西90cm，深さは50cmを計る土坑である。覆土は黒色土，壁面は東壁は垂直に近く，西壁は内弯していた。床面はかたいタタキで大般水平となっていた。

遺物は，何も出土しなかった。

第15号土坑（第9図，図版5）

本土坑は第8号住居址の北東の位置に床面を掘り込んで構築され，覆土は黒褐色土層である。プランは円形状を呈し，規模は南北90cm，東西92cm程を計る。

遺物は，土師器の埦の出土があった。

第16号土坑（第9図，図版5）

本土坑は第8号住居址の南西の位置に床面を掘り込んで構築され，覆土は黒色土である。プランは北側へはいりこんではいるが，全般的には円形状を呈し，規模は南北95cm，東西77cm程を計る。

遺物は，何も出土しなかった。

第17号土坑（第3図，図版3）

本土坑は第3号住居址の北壁近くの位置に黄褐色土層を掘り込んで構築され，覆土は黒色土である。プランは円形を呈し，規模は南北80cm，東西75cmを計る。遺物は何も出土しなかった。

（飯塚政美）

第3節　ロームマウンド

第1号ロームマウンド（第14図，図版7）

第11号住居址の南側に検出されたもので，南北1m50cm程，東西80cm程，高さは20cm程を測る。さらにマウンドの中央部の頂部は若干凹む傾向がある。マウンドの形成土は大部分がソフトローム層であり，なかに黄褐色土層や黒色土が混入していた。

遺物は，何も出土しなかった。　（飯塚政美）

第II章　遺　　物

第1節　土　　器

土器の説明は表を作製し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を附記しておくことにする。文様は主たるものを明記することにした。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

（飯塚政美）

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
15	1	少量の長石	良好	赤 褐 色	10	隆線　連続爪形文	第1号住居址
〃	2	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	3	多量の雲母	〃	〃	7	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	4	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	5	〃	普通	黒 褐 色	9	隆線　沈線	〃
〃	6	〃	〃	〃	7	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	7	〃	不良	茶 褐 色	6	隆線　沈線	〃
〃	8	少量の雲母	良好	黒 褐 色	9	粘土紐　刺突文	〃
〃	9	多量の雲母	普通	〃	7	粘土紐　沈線　刺突文	〃
〃	10	多量の長石	不良	明茶褐色	6	沈線　縄文	〃
〃	11	少量の長石	良好	黄 褐 色	7	〃	〃
〃	12	多量の雲母	不良	茶 褐 色	7	隆線　沈線	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
16	1	少量の長石	普通	赤 褐 色	7	縄文	第2号住居址
〃	2	多量の雲母	〃	〃	10	隆線　沈線	〃
〃	3	〃	良好	黒 褐 色	6	粘土紐　沈線	〃
〃	4	〃	〃	赤黄褐色	6	〃	〃
〃	5	少量の長石	普通	黒 褐 色	6	〃	〃
〃	6	多量の長石	〃	赤 褐 色	5	粘土紐　沈線　刻目	〃
〃	7	少量の長石	良好	黒 褐 色	6	隆線　沈線	〃
〃	8	〃	普通	赤 褐 色	7	粘土紐　沈線　刻目	〃
〃	9	〃	〃	黒 褐 色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	10	〃	不良	赤 褐 色	6	沈線	〃
〃	11	少量の雲母	普通	明黄褐色	10	〃	〃
〃	12	多量の雲母	〃	赤 褐 色	12	〃	〃
〃	13	少量の長石	〃	〃	5	沈線　刻目	〃

第3表　出土土器の形状一覧表（その3）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
17	1	多量の雲母	普通	赤 褐 色	11	隆線　爪形文	第3号住居址
〃	2	〃	〃	黒 褐 色	8	隆線　沈線　爪形文	〃
〃	3	少量の長石	〃	明黄褐色	8	沈線	〃
〃	4	多量の雲母	〃	赤 褐 色	8	隆線　沈線	〃
〃	5	〃	不良	明黄褐色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	6	多量の長石	〃	赤 褐 色	7	隆線　沈線	〃
〃	7	多量の雲母	〃	黒 褐 色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	8	多量の長石	良好	明黄褐色	9	〃	〃
〃	9	〃	普通	茶 褐 色	6	〃	〃
〃	10	〃	不良	赤 褐 色	8	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	11	〃	良好	〃	10	沈線	〃
〃	12	〃	不良	黒 褐 色	10	沈線　縄文	〃
〃	13	〃	〃	赤 褐 色	9	沈線	〃

第4表　出土土器の形状一覧表（その4）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
18	1	少量の雲母	良好	赤 褐 色	7	縄文　沈線	第4号住居址
〃	2	〃	普通	〃	11	粘土紐　沈線	〃
〃	3	少量の長石	良好	黒 褐 色	9	粘土紐　刺突文	〃
〃	4	少量の雲母	不良	茶 褐 色	12	沈線	〃
〃	5	少量の長石	〃	赤 褐 色	9	粘土紐　沈線	〃
〃	6	〃	〃	〃	11	粘土紐　刻目	〃
〃	7	多量の長石	〃	黒 褐 色	10	〃	〃
〃	8	多量の雲母	良好	〃	9	隆帯　沈線　刻目	〃
〃	9	〃	〃	〃	10	爪形文	〃
〃	10	〃	〃	茶 褐 色	9	刻目　隆線	〃
〃	11	多量の長石	不良	赤 褐 色	10	隆線　爪形文	〃
〃	12	〃	良好	黄 褐 色	10	隆線　刻目	〃
〃	13	〃	〃	明黄褐色	7	沈線	〃

第5表　出土土器の形状一覧表（その5）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
19	1	多量の雲母	良好	赤 褐 色	8	縄文　沈線	第5号住居址
〃	2	〃	不良	茶 褐 色	12	沈線　刺突文	〃
〃	3	〃	普通	黒 褐 色	10	指頭圧痕文　沈線	〃
〃	4	〃	〃	〃	11	隆帯　沈線　刻目	〃
〃	5	少量の長石	不良	赤 褐 色	10	沈線　刺突文	〃
〃	6	〃	良好	〃	9	隆線　刻目　沈線	〃
〃	7	多量の長石	〃	黒 褐 色	10	〃	〃
〃	8	多量の雲母	不良	黄 褐 色	9	〃	〃
〃	9	〃	普通	赤 褐 色	10	爪形文　刻目　隆線　沈線	〃
〃	10	少量の雲母	良好	〃	8	沈線　刻目　刺突文	〃
〃	11	〃	〃	黒 褐 色	7	沈線　刻目	〃
〃	12	多量の雲母	〃	赤 褐 色	8	隆線　沈線	〃
〃	13	〃	普通	茶 褐 色	10	縄文　沈線	〃
〃	14	少量の雲母	〃	赤 褐 色	8	隆線　沈線	〃

第6表　出土土器の形状一覧表（その6）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
20	1	多量の長石	普通	黒 褐 色	11	隆線　沈線	第6号住居址
〃	2	少量の雲母	〃	赤 褐 色	8	沈線　爪形文	〃
〃	3	多量の長石	不良	黒 褐 色	9	縄文　沈線	〃
〃	4	多量の雲母	普通	〃	9	〃	〃
〃	5	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	6	少量の長石	〃	〃	6	沈線	〃
〃	7	少量の雲母	〃	黄 褐 色	10	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	8	多量の雲母	〃	〃	10	粘土紐	〃
〃	9	〃	〃	〃	10	〃	〃
〃	10	少量の長石	〃	赤 褐 色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	11	〃	良好	黒 褐 色	7	沈線　縄文	第7号住居址
〃	12	多量の長石	〃	茶 褐 色	8	沈線　縄文　連続爪形文	〃
〃	13	多量の雲母	〃	赤 褐 色	8	縄文	〃

第7表　出土土器の形状一覧表（その7）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
21	1	多量の長石	良好	茶 褐 色	7	カキ目(土師器)	第8号住居址
〃	2	〃	不良	〃	9	木葉底(土師器)	〃
〃	3	少量の雲母	良好	赤 褐 色	5	糸切底(土師器)	〃
〃	4		〃	白 灰 色	4	灰釉陶器	〃
〃	5		〃	ねずみ色	6	須恵器	〃
〃	6		〃	白 灰 色	4	灰釉陶器	〃
〃	7		〃	〃	2	〃	〃
〃	8		〃	〃	4	〃	〃
〃	9		〃	〃	4	〃	〃

第8表　出土土器の形状一覧表（その8）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
22	1	少量の雲母	良好	明黄褐色	10	隆線　刻目　爪形文	第9号住居址
〃	2	〃	〃	赤 褐 色	8	隆線　刻目	〃
〃	3	多量の長石	〃	黒 褐 色	9	隆線　刺突文　爪形文	〃
〃	4	〃	〃	茶 褐 色	10	隆線　爪形文	〃
〃	5	多量の雲母	普通	〃	8	隆線　沈線	〃
〃	6	〃	〃	〃	10	〃	〃
〃	7	〃	〃	赤 褐 色	11	沈線	〃
〃	8	少量の長石	〃	〃	7	〃	〃
〃	9	多量の雲母	不良	茶 褐 色	9	隆線　沈線	〃
〃	10	〃	普通	黒 褐 色	8	〃	〃
〃	11	少量の長石	〃	明黄褐色	7	沈線	〃
〃	12	多量の雲母	不良	赤 褐 色	10	隆線　沈線	〃
〃	13	〃	良好	明黄褐色	10	隆線　縄文	〃

第9表　出土土器の一覧表（その9）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
23	1	少量の長石	良好	黒 褐 色	7	隆線　刻目	第10号住居址
〃	2	多量の雲母	〃	〃	8	〃	〃
〃	3	多量の長石	不良	茶 褐 色	11	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	4	〃	良好	明黄褐色	8	〃	〃
〃	5	多量の雲母	〃	黒 褐 色	7	〃	〃
〃	6	多量の長石	〃	明黄褐色	8	隆帯　刺突文	〃
〃	7	多量の雲母	不良	赤 褐 色	10	爪形文	〃
〃	8	〃	良好	〃	7	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	9	多量の長石	不良	黒 褐 色	10	縄文	〃
〃	10	多量の雲母	良好	明茶褐色	8	沈線	〃
〃	11	〃	普通	赤 褐 色	9	〃	〃
〃	12	〃	〃	黒 褐 色	7	〃	〃
〃	13	少量の長石	良好	茶 褐 色	8	〃	〃
〃	14	〃	〃	〃	8	粘土紐	〃

第10表　出土土器の形状一覧表（その10）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)		備　考
24	1	多量の雲母	普通	茶 褐 色	7	沈線	第11号住居址
〃	2	〃	〃	黒 褐 色	6	沈線　刺突文	〃
〃	3	〃	良好	茶 褐 色	7	隆線　爪形文　刺突文	〃
〃	4	多量の長石	〃	〃	10	爪形文	〃
〃	5	多量の雲母	〃	〃	10	隆線　爪形文	〃
〃	6	〃	〃	黒 褐 色	12	〃	〃
〃	7	多量の長石	不良	赤 褐 色	10	沈線　爪形文	〃
〃	8	〃	〃	〃	8	隆線　爪形文	〃
〃	9	少量の長石	良好	〃	9	隆線　沈線	〃
〃	10	多量の雲母	不良	〃	8	〃	〃
〃	11	多量の長石	〃	茶 褐 色	10	〃	〃
〃	12	少量の長石	良好	赤 褐 色	7	〃	〃
〃	13	多量の雲母	普通	茶 褐 色	8	〃	〃
〃	14	〃	〃	黒 褐 色	9	〃	〃
〃	15	多量の長石	〃	茶 褐 色	8	〃	〃

表11表　出土土器の形状一覧表（その11）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
25	1	多量の長石	良好	黒 褐 色	8	沈線	第12号住居址
〃	2	〃	普通	赤 褐 色	8	隆線　爪形文	〃
〃	3	〃	〃	黒 褐 色	12	沈線　爪形文	〃
〃	4	少量の雲母	良好	赤 褐 色	7	隆線　爪形文	〃
〃	5	多量の雲母	〃	明黄褐色	8	縄文	〃
〃	6	多量の長石	普通	黒 褐 色	7	沈線	〃
〃	7	〃	〃	赤 褐 色	10	隆線　刺突文	〃
〃	8	〃	〃	黄 褐 色	10	沈線　刺突文	〃
〃	9	多量の雲母	〃	黒 褐 色	8	隆線　沈線　刺突文	〃
〃	10	多量の長石	〃	茶 褐 色	6	隆線　沈線	〃
〃	11	〃	良好	〃	7	隆線　沈線	〃
〃	12	〃	普通	黒 褐 色	8	〃	〃
〃	13	多量の雲母	不良	黄 褐 色	10	〃	〃

第 12 表　出土土器の形状一覧表（その 12）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
26	1	多量の長石	良好	赤 褐 色	5	はけ目(土師器)	第17号住居址
〃	2	〃	〃	〃	4	土師器	〃
〃	3	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	4		〃	灰 白 色	2	灰釉陶器	〃
〃	5		〃	〃	2	〃	〃
〃	6	多量の長石	〃	茶 褐 色	8	隆線　沈線　刺突文	第18号住居址
〃	7	〃	〃	黒 褐 色	7	隆線　沈線	〃
〃	8	〃	〃	〃	8	粘土紐　沈線　刺突文	〃
〃	9	〃	〃	赤 褐 色	9	隆線　沈線	〃
〃	10	多量の雲母	〃	〃	6	沈線	〃
〃	11	〃	普通	茶 褐 色	8	隆線　沈線　刻目	〃
〃	12	〃	良好	〃	8	縄文	〃
〃	13	〃	〃	〃	7	隆線　沈線	〃
〃	14	〃	〃	黒 褐 色	6	沈線　刺突文	〃

第 13 表　出土土器の形状一覧表（その 13）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
27	1	多量の雲母	良好	赤 褐 色	9	沈線　隆線　爪形文	第19号住居址
〃	2	多量の長石	〃	黒 褐 色	8	隆線　爪形文	〃
〃	3	多量の雲母	〃	明黄褐色	12	沈線　爪形文	〃
〃	4	多量の長石	〃	茶 褐 色	10	粘土紐　縄文	〃
〃	5	〃	〃	〃	8	粘土紐　刺突文	〃
〃	6	多量の雲母	〃	黒 褐 色	7	縄文　粘土紐　刺突文	〃
〃	7	少量の長石	普通	黄 褐 色	10	粘土紐　沈線	〃
〃	8	多量の長石	〃	〃	6	〃	〃
〃	9	多量の雲母	良好	黒 褐 色	8	粘土紐　沈線　縄文	〃
〃	10	〃	〃	茶 褐 色	10	沈線　刺突文	〃
〃	11	多量の長石	〃	黒 褐 色	7	隆線　沈線	〃
〃	12	〃	普通	黄 褐 色	10	沈線	〃

第 14 表　出土土器の形状一覧表（その 14）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
28	1	多量の長石	良好	黄 褐 色	7	沈線	第20号住居址
〃	2	多量の雲母	〃	赤 褐 色	8	隆線　刻目	〃
〃	3	多量の長石	〃	〃	10	〃	〃
〃	4	〃	〃	〃	8	隆線　沈線　刻目	〃
〃	5	〃	〃	〃	13	隆帯　沈線	〃
〃	6	〃	〃	明 黄褐色	10	沈線　刻目	〃
〃	7	〃	〃	〃	10	隆帯　刻目	〃
〃	8	〃	〃	黒 褐 色	8	沈線	〃
〃	9	多量の雲母	不良	赤 褐 色	8	隆線　縄文　爪形文	〃
〃	10	多量の長石	〃	黒 褐 色	7	隆帯　爪形文	〃
〃	11	多量の雲母	普通	茶 褐 色	8	隆線　沈線	〃
〃	12	〃	〃	〃	6	沈線	〃

第15表　出土土器の形状一覧表（その15）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
29	1	多量の雲母	良好	茶 褐 色	7	縄文　沈線	第21号住居址
〃	2	〃	〃	黄 褐 色	9	隆帯　爪形文	〃
〃	3	多量の長石	〃	赤 褐 色	10	隆帯　沈線　刻目	〃
〃	4	〃	〃	〃	7	隆帯　刻目　爪形文	〃
〃	5	〃	〃	〃	10	隆帯　沈線	〃
〃	6	〃	〃	黄 褐 色	6	隆帯	〃
〃	7	〃	〃	黒 褐 色	8	粘土紐　爪形文	〃
〃	8	〃	〃	黄 褐 色	10	渦巻文　沈線	〃

第16表　出土土器の形状一覧表（その16）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
30	1	多量の雲母	良好	黒 褐 色	9	爪形文　沈線	第23号住居址
〃	2	多量の長石	〃	茶 褐 色	9	隆線　爪形文	〃
〃	3	多量の雲母	〃	〃	7	沈線　刻目	〃
〃	4	多量の長石	〃	黒 褐 色	8	沈線　圧痕文	〃
〃	5	〃	〃	赤 褐 色	10	隆線　刻目	〃
〃	6	〃	〃	黒 褐 色	10	隆線　爪形文	〃
〃	7	〃	普通	茶 褐 色	9	渦巻文	〃
〃	8	〃	〃	赤 褐 色	11	隆線　沈線	〃
〃	9	〃	良好	黒 褐 色	10	縄文　沈線	〃
〃	10	多量の雲母	普通	茶 褐 色	9	沈線	〃
〃	11	〃	良好	黒 褐 色	10	〃	〃
〃	12	多量の長石	普通	茶 褐 色	8	〃	〃
〃	13	〃	〃	黒 褐 色	13	隆線　沈線	〃

第17表　出土土器の形状一覧表（その17）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
31	1	多量の雲母	良好	黒 褐 色	9	隆線　爪形文	第10号土坑
〃	2	少量の長石	〃	赤 褐 色	7	隆線　沈線	第2号土坑
〃	3	多量の長石	〃	〃	9	縄　文	〃
〃	4	〃	普通	茶 褐 色	9	隆線　刺突文	第6号土坑
〃	5	少量の長石	良好	黄 褐 色	8	刺突文	〃
〃	6	〃	〃	〃	7	隆線　爪形文	〃
〃	7	〃	〃	〃	7	爪形文	〃
〃	8	少量の雲母	〃	明黄褐色	8	縄文　沈線	〃
〃	9	〃	普通	明 白 色	9	〃	第10号土坑
〃	10	〃	不良	赤 褐 色	7	隆線　刺突文	〃
〃	11	〃	〃	黄 褐 色	9	刺突文	第6号土坑
〃	12	〃	〃	〃	9	〃	〃
〃	13	少量の長石	良好	茶 褐 色	6	隆線　刺突文	第10号土坑
〃	14	〃	〃	赤 褐 色	7	隆線　沈線	第2号土坑

第2節　石　　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（飯塚政美）

第18表　出土石器の形状一覧表（その1）

図版	番号	名　　称	器　形	石　質	備　　考
32	1	打製石斧	撥　形	粘板岩	第1号住居址
〃	2	〃	〃	硬砂岩	第2号住居址
〃	3	〃	〃	粘板岩	〃
〃	4	磨　　石		硬砂岩	〃
〃	5	打製石斧	撥　形	砂　岩	〃
〃	6	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第3号住居址
〃	7	横 刃 型		粘板岩	〃
〃	8	打製石斧	撥　形	硬砂岩	〃
〃	9	打製石斧	撥　形	粘板岩	第4号住居址
〃	10	〃	〃	蛇紋岩	第6号住居址

第19表　出土石器の形状一覧表（その2）

図版	番号	名　　称	器　形	石　質	備　　考
33	1	石　　刃	縦　型	黒耀石	第9号住居址
〃	2	磨　　石		安山岩	第12号住居址
〃	3	棒状石器		蛇紋岩	第11号住居址
〃	4	打製石斧	撥　形	緑泥岩	第20号住居址
〃	5	〃	短冊形	〃	第21号住居址
〃	6	黒耀石原石		黒耀石	〃
〃	7	打製石斧	短冊形	緑泥岩	第23号住居址
〃	8	磨　　石		安山岩	〃
〃	9	〃		〃	〃
〃	10	石　　錘		硬砂岩	〃

第Ⅲ章　ま　と　め

今回の発掘調査で発見された住居址は23軒，土坑は17基。ロームマウンド1基である。充分なる検討をするのには時間的な余裕がないために，問題点を列記して簡潔的に述べてみたい。

縄文時代の遺構としては，住居址と土坑があげられる。住居址は同時代のものは全部で20軒である。それらを細分してみると，縄文中期初頭2軒，縄文中期中葉1軒，縄文中期後葉17軒である。次に住居址の主たる項目であるプラン，周溝の有無，炉の有無及び形状さらに状態・埋甕等について説明を加えていくことにする。

プランは大部分は円形や長円形状を呈していたが，なかには第4号住居址のように角張ったようなものも認められた。時期は縄文中期後葉であるだけに，今後の大きな研究課題になると思われる。床面上にみられる周溝は完全な場合と不完全な場合とを合せて，全部で5カ所認められた。炉は一般的にみられる石囲炉，(構築時は石囲炉であったが後世に攪乱，あるいは切り合い関係のために破壊されたのを含めて）全部で22個である。特殊な炉としては，第5号住居址のように埋甕炉のようなもの，これもただ土器を埋めただけではなくて，周囲に同心円状に小石を配列してある。第21号住居址は炉の周囲に三重に同心円状に石を配列してあった。第5号住居址及び第21号住居址の2つの炉は極めて資料的価値の高いものと思われる。形態は炉内を掘り凹めたもの，また，平垣なものと大般二種類に大別できた。さらに，炉内の焼土の量は全般的にみて，微量であった。

埋甕の出土は第4号住居址，第9号住居址，第11号住居址の3軒で発見され，特に第11号住居址では2カ所にわたって埋っていた。

埋甕の位置は第4号住居址では南側，第9号住居址，第11号住居址の2個はそれぞれ東側に位置していた。

出土状況は全て正位の状態であり，その土器の破損状況は胴下半分から底部にかけて欠損している場合が多かった。ただ，第11号住居址の埋甕1のようなケースはまれな例に属すると思われる。

住居址内より出土した遺物は相当量に達している。土器について考えてみるならば，特に今回は南信州編年に限定してみるならば，梨久保式，平出3A式，藤内式，井戸尻式，曽利式等，縄文中期全般にわたっている。

土坑は全部で17基検出され，大きさ，及び形状等，多種多様であった。土坑内から検出した遺物は少量であったが，大部分，縄文中期のものと考えられる。

平安時代の遺構は竪穴住居址3軒のみである。それは第8号住居址，第13号住居址，第17号住居址であり，その平面プランは3軒とも隅丸方形を呈している。カマドの位置は第8号住居址と第17号住居址は北側，第13号住居址は西側にあり，石組粘土カマドであった。

北側にカマドを有するのと，西側にカマドを有するのでは時代差があるように思われ，また，わずかに季節的な風向の移動を察知できるのではないか。　（飯塚政美）

図　　版

遺跡地を西側より眺む

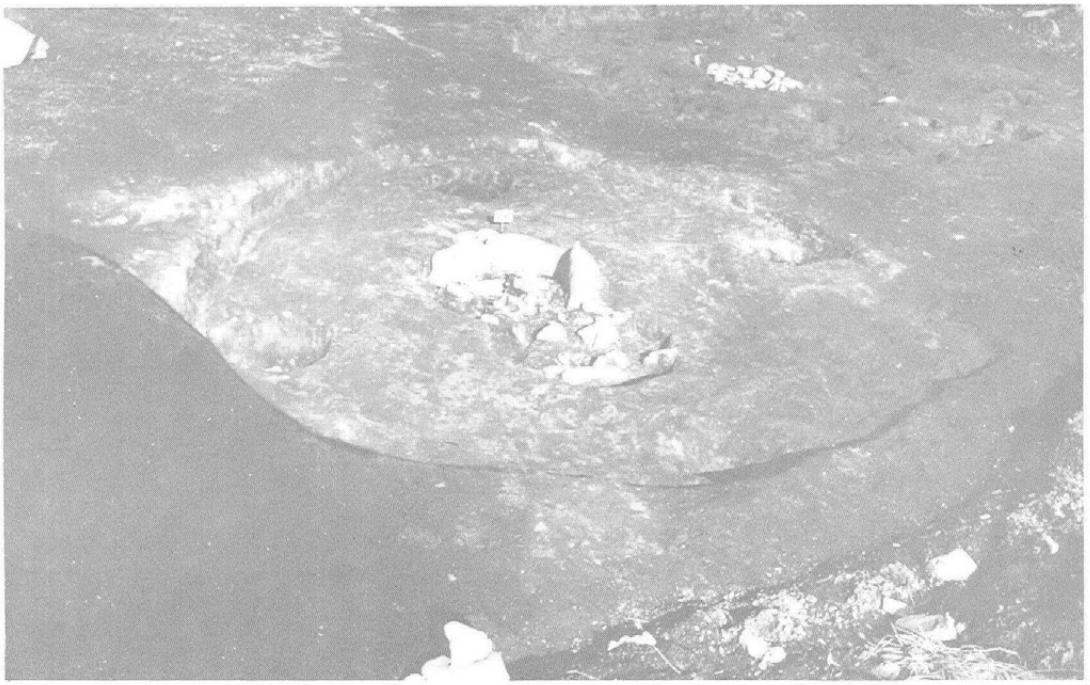
遺跡地を南側より眺む

図版１　遺跡全景

遺構配置（東側より眺む）

第１号住居址

図版２　遺　　構



第 2 号住居址

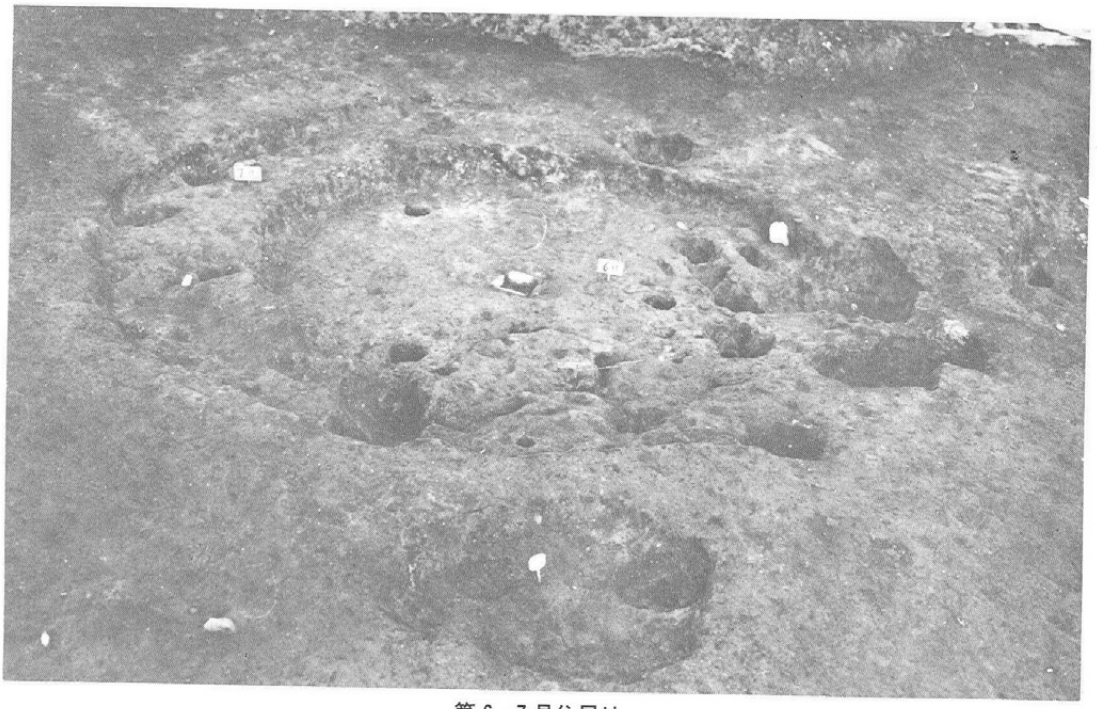
第 3 号住居址及び第 17 号土坑

図版 3　遺　　構

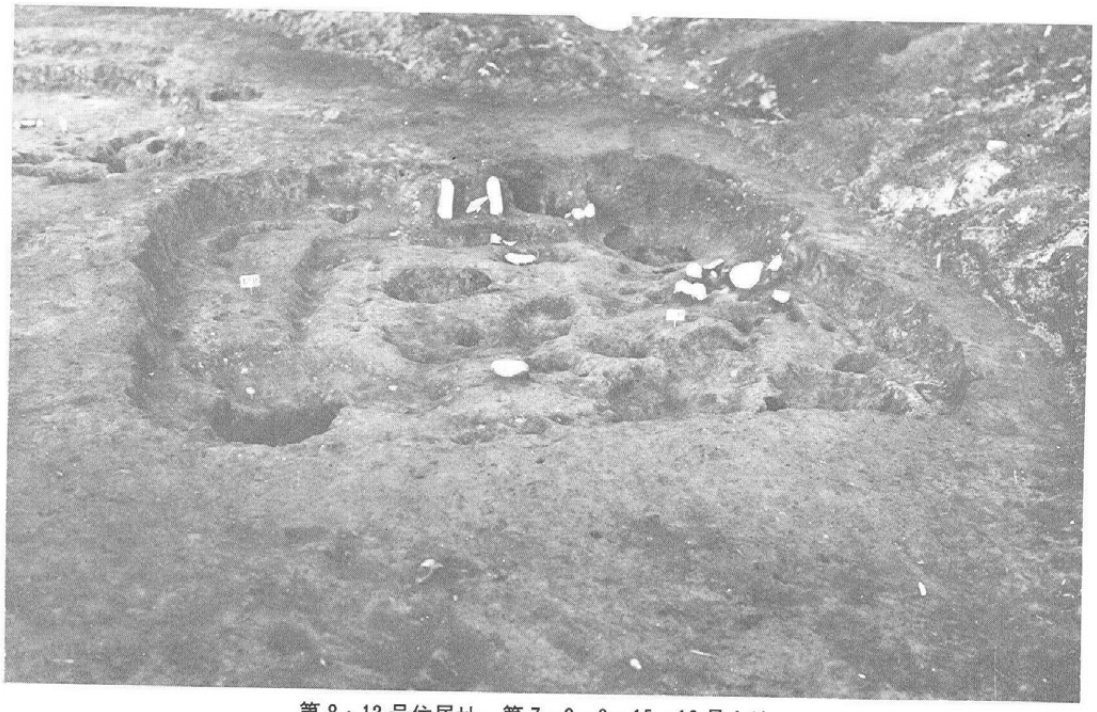
第４号住居址及び第１号土坑

第５号住居址

図版４　遺　　構



第6・7号住居址



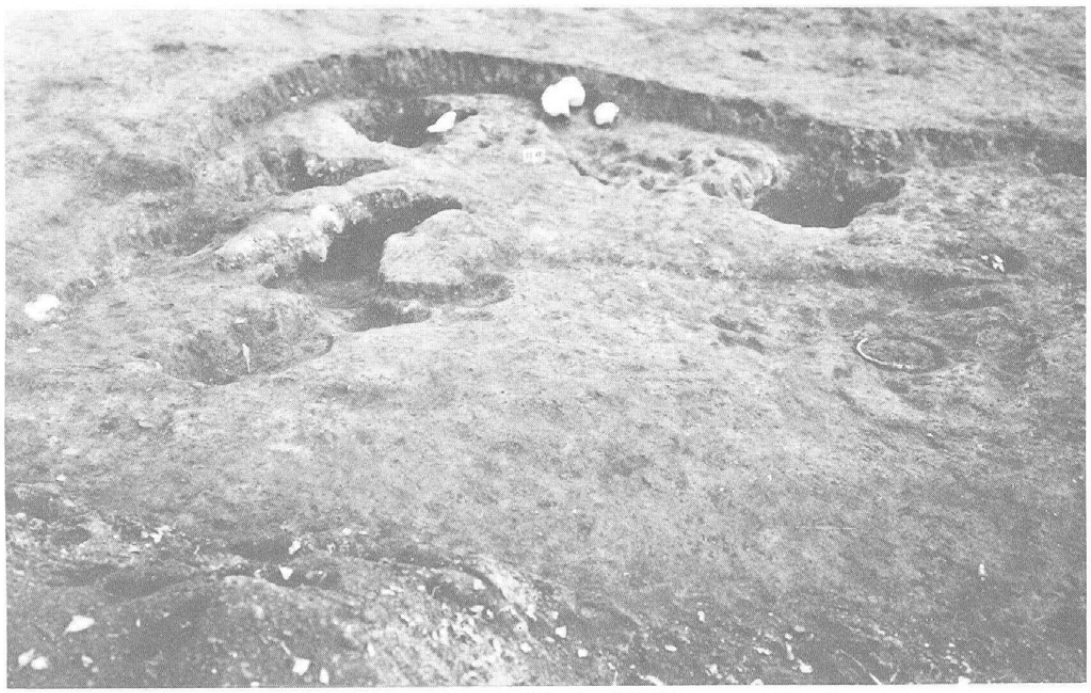
第8・13号住居址，第7・8・9・15・16号土拡

図版5　遺　　構

第 9・14 号住居址

第 10・15・16 号住居址

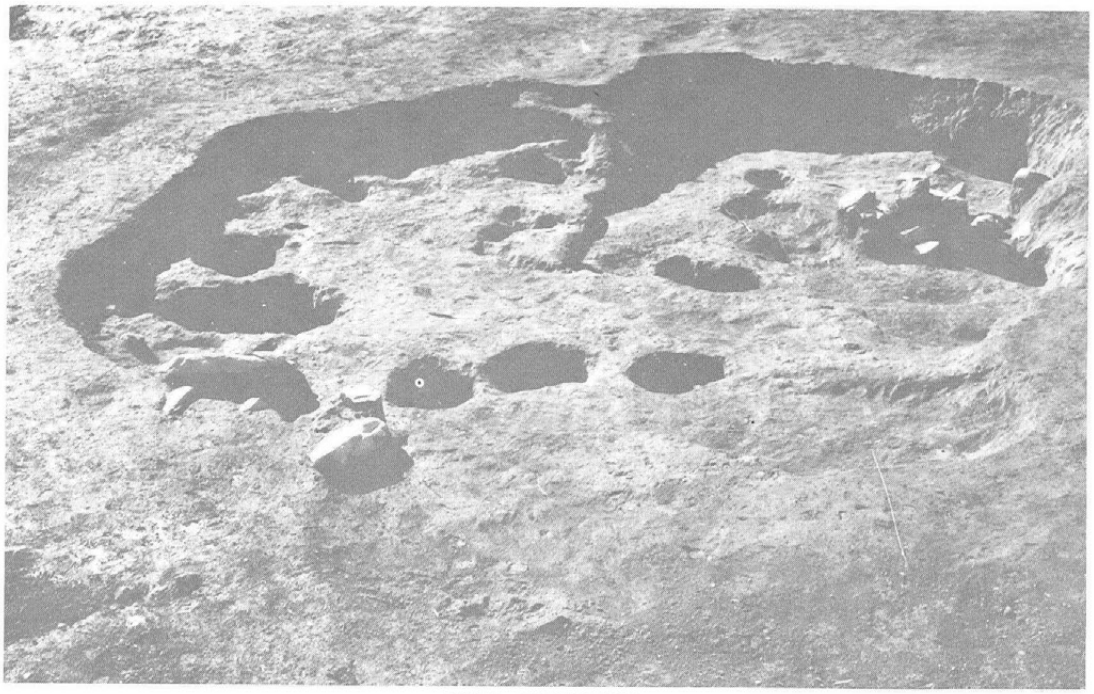
図版 6　遺　　構



第11号住居址・第12～14号土坑・第1号ロームマウンド

第12号住居址・第3・11号土坑

図版7　遺　　構



第 17・23 号住居址

第 18・22 号住居址

図版 8　遺　　構

第 19・20 号住居址

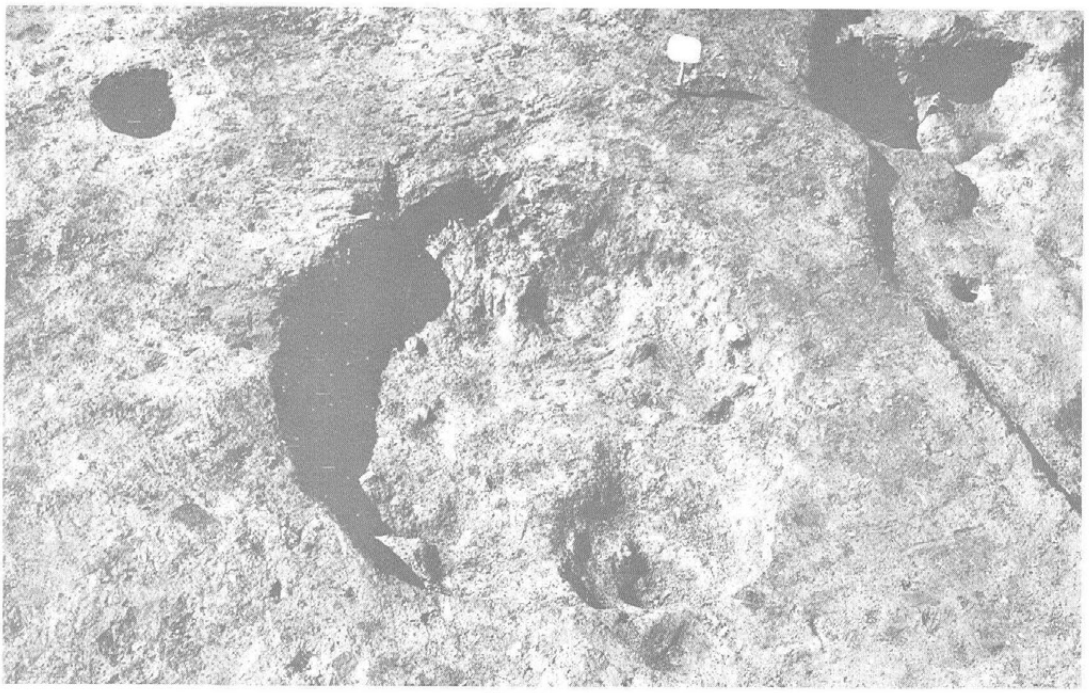
第 21 号住居址

図版 9　遺　　構

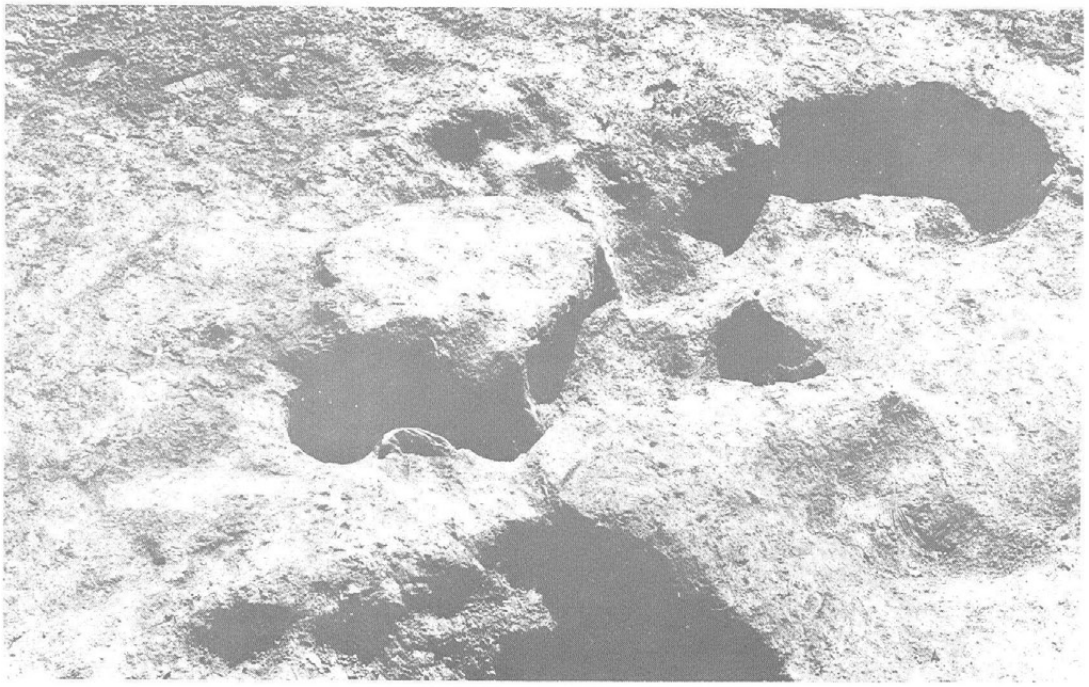
第１号土坑

第２号土坑

図版 10　遺　　構

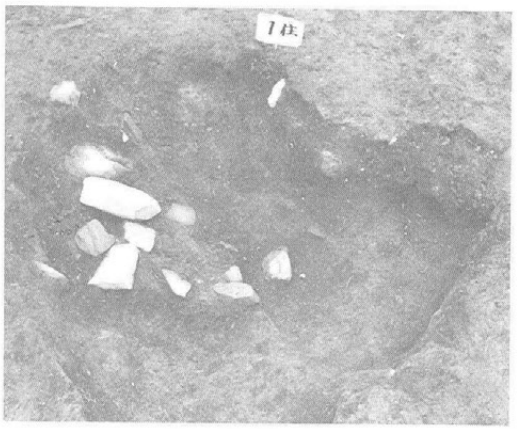


第５号土坑



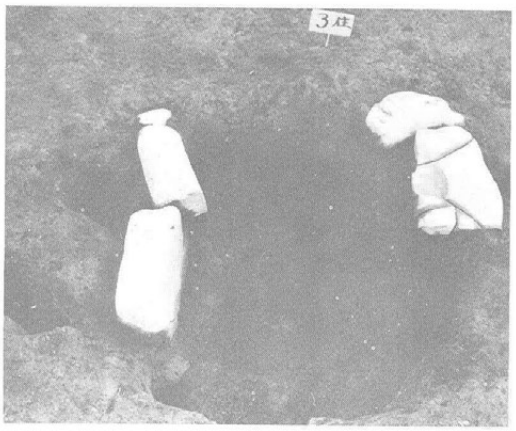
第１号ロームマウンド

図版 11　遺　　構



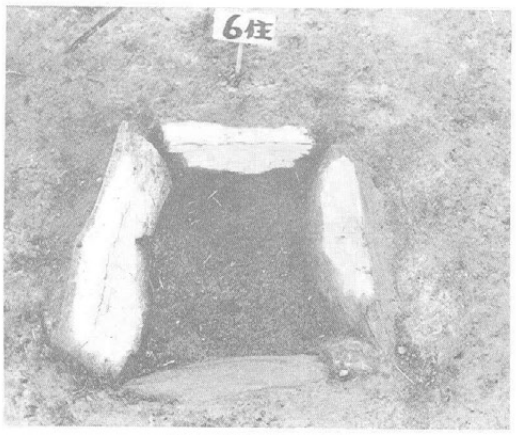
第 1 号住居址炉址

第 2 号住居址炉址

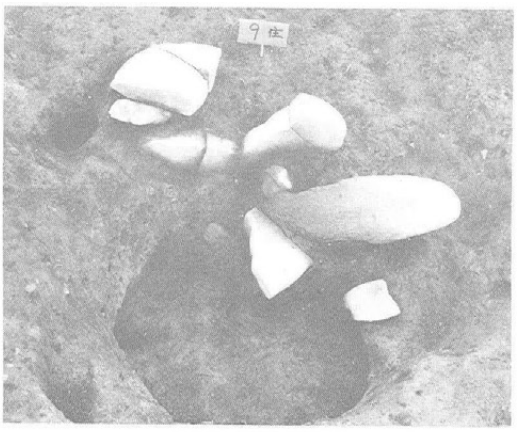


第 3 号住居址炉址

第 5 号住居址炉址

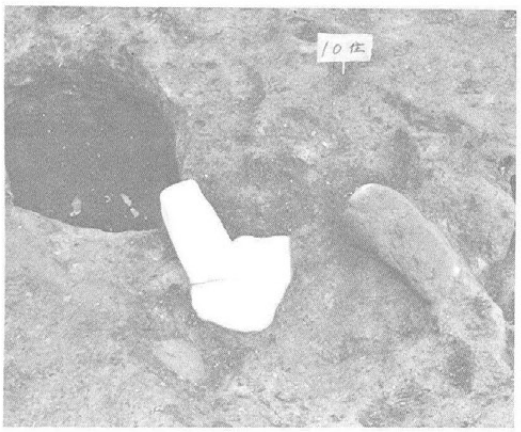


第 6 号住居址炉址

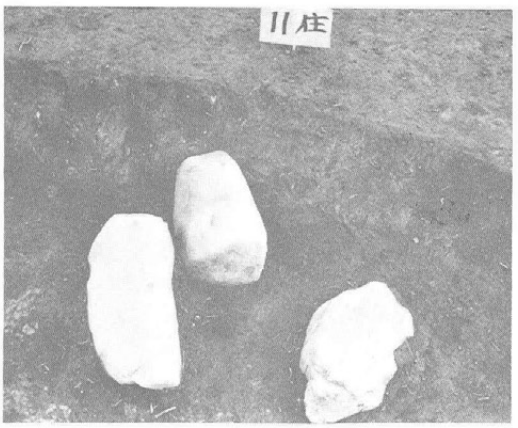


第 9 号住居址炉址

図版 12　遺　　構

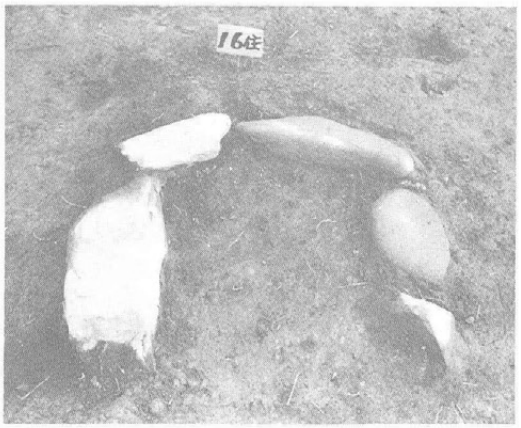


第 10 号住居址炉址

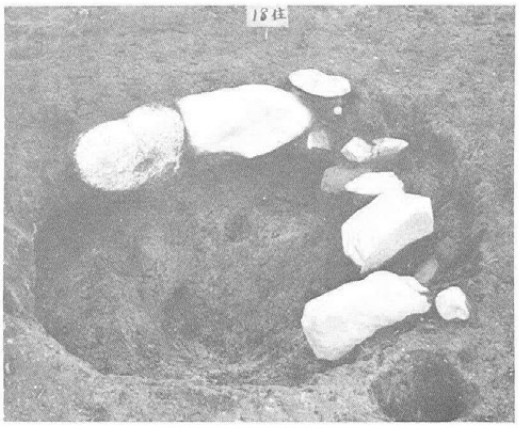


第 11 号住居址炉址

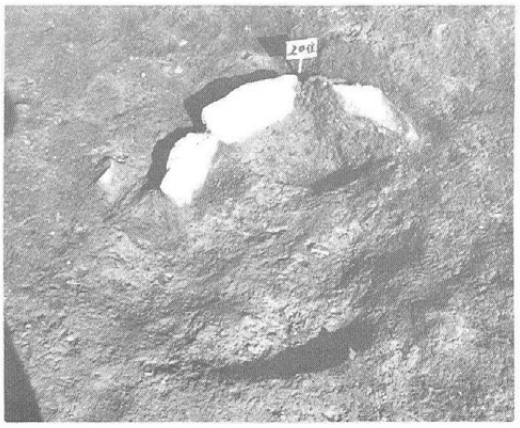
第 12 号住居址炉址



第 16 号住居址炉址

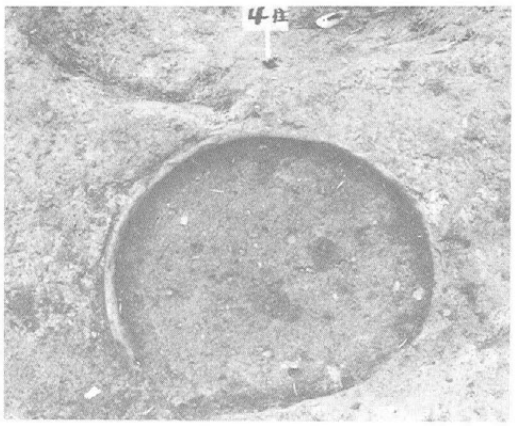


第 18 号住居址炉址



第 20 号住居炉址

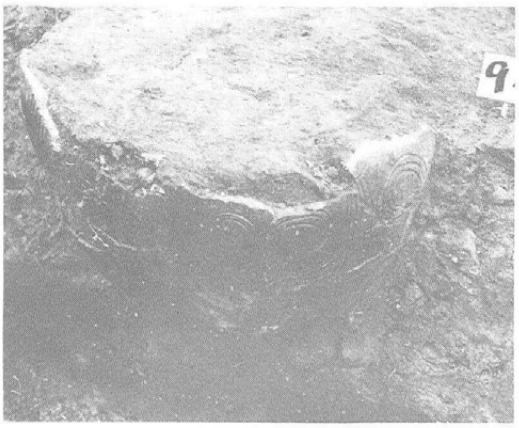
図版 13　遺　　構



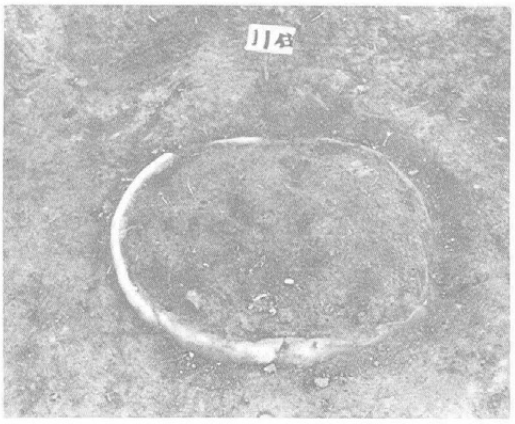
土器出土状況

土器出土状況

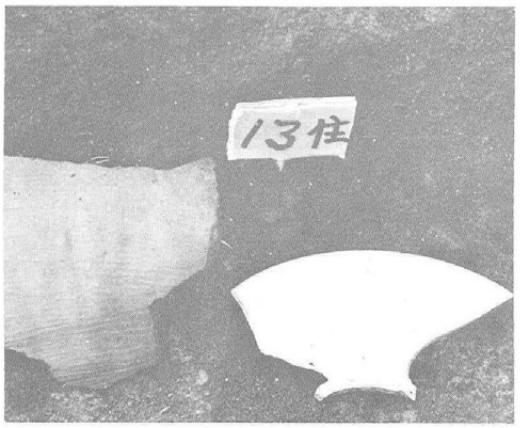
土器出土状況



土器出土状況

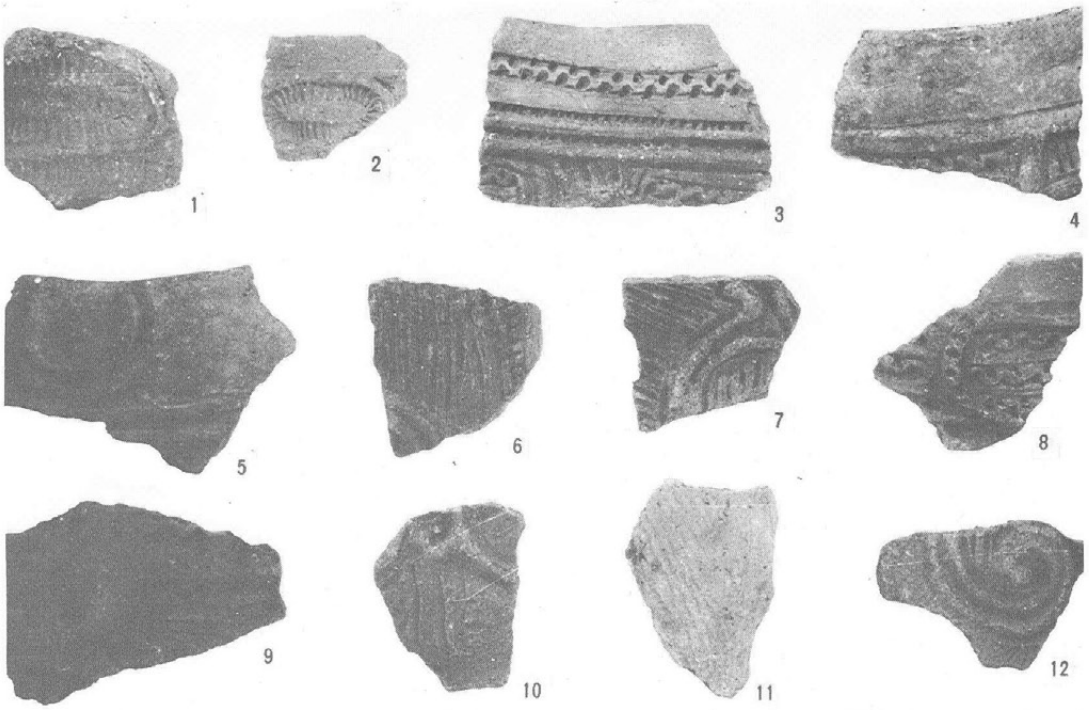


土器出土状況

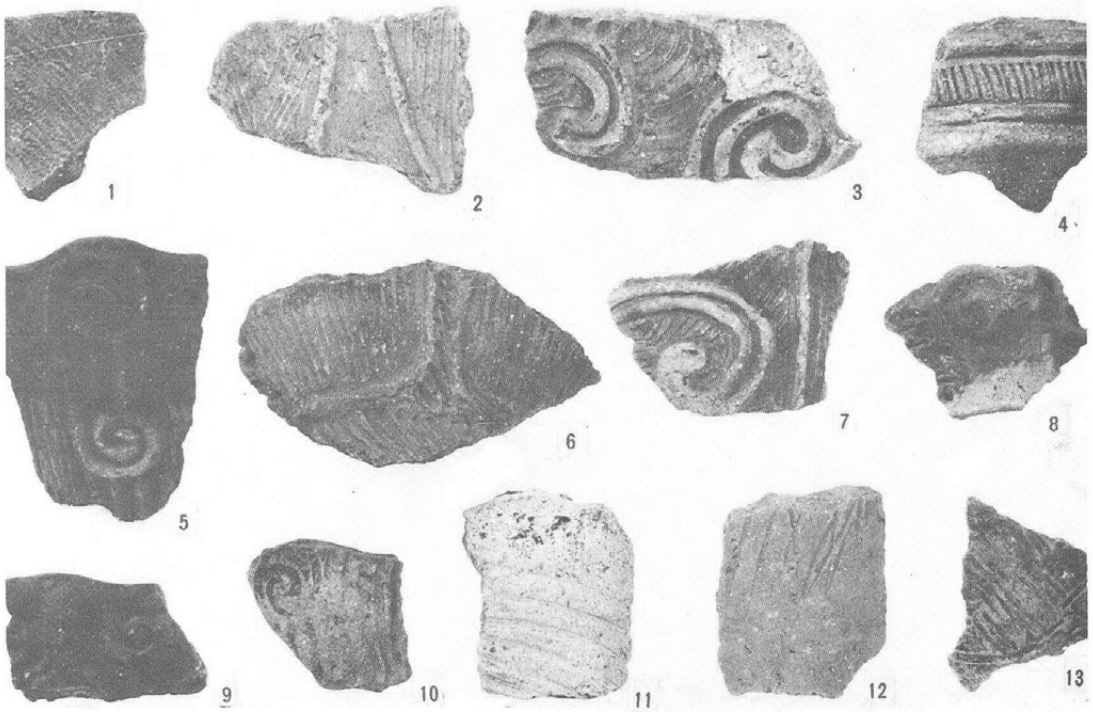


土器出土状況

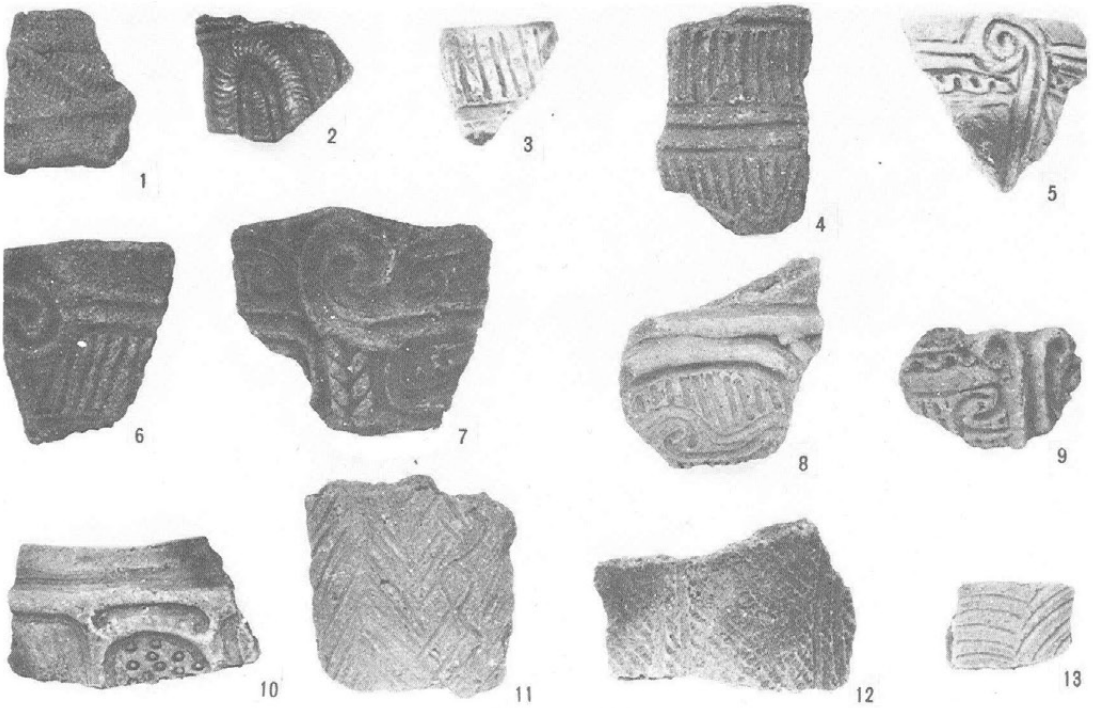
図版 14　遺物出土状況



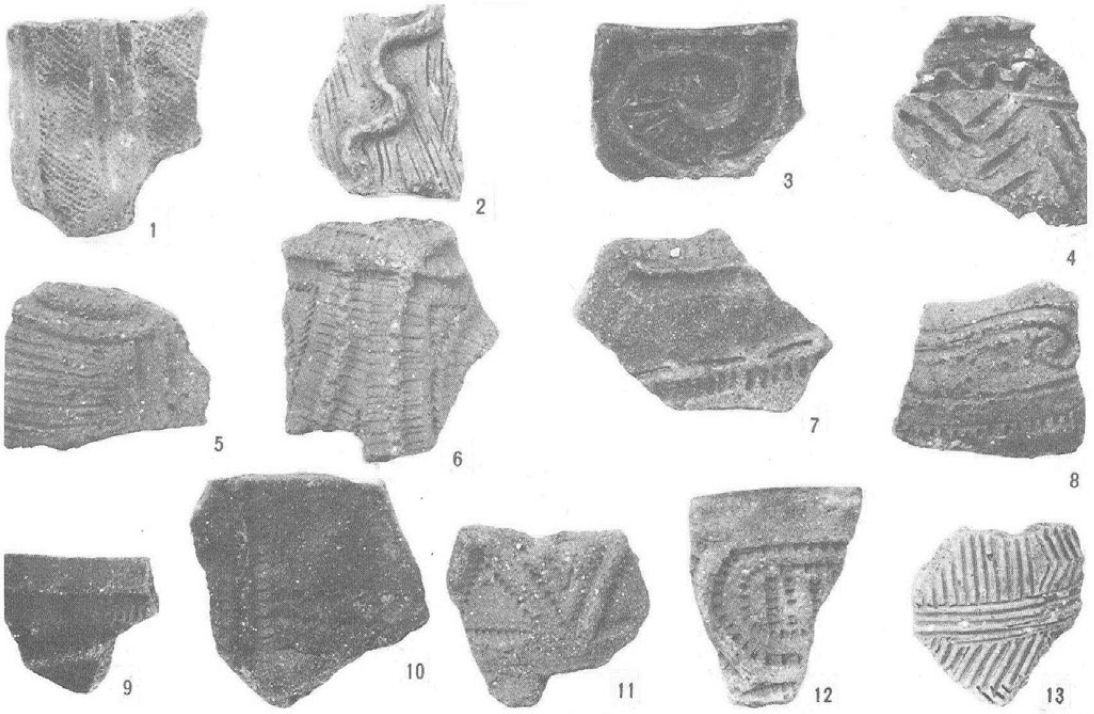
図版 15　出土土器



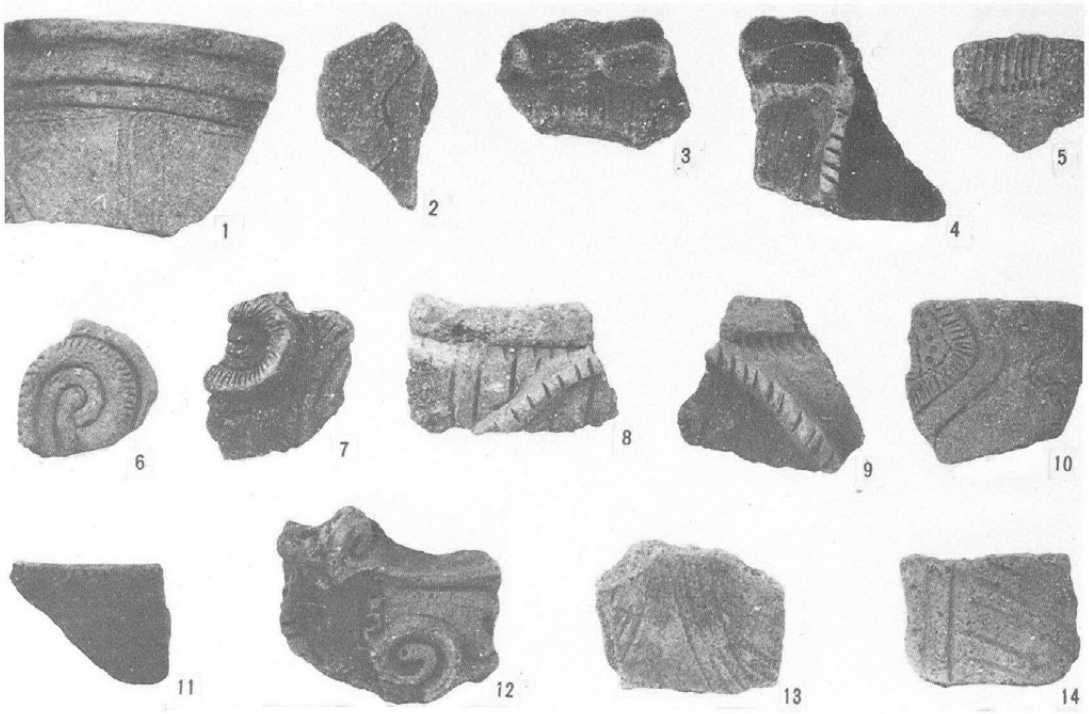
図版 16　出土土器



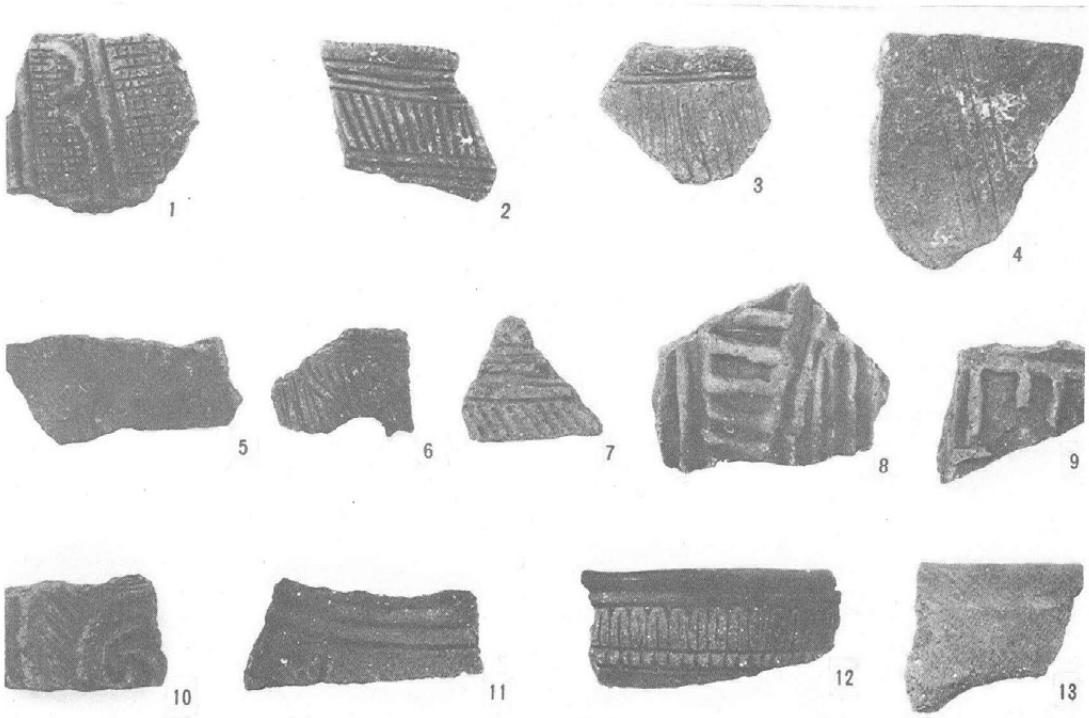
図版 17　出土土器



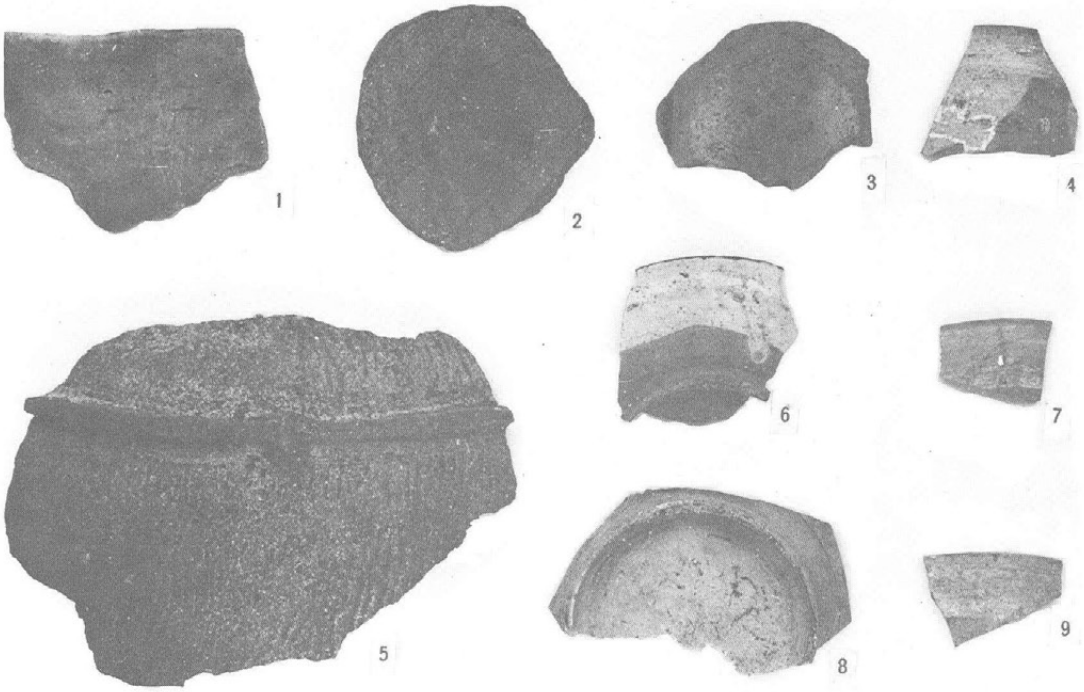
図版 18　出土土器



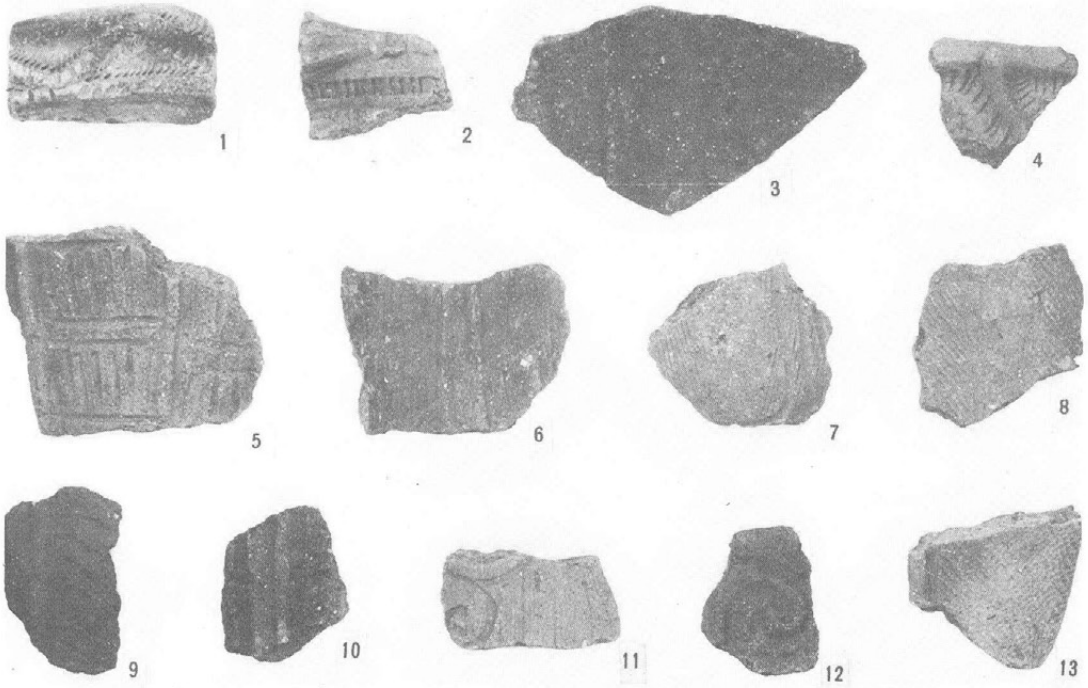
図版 19　出土土器



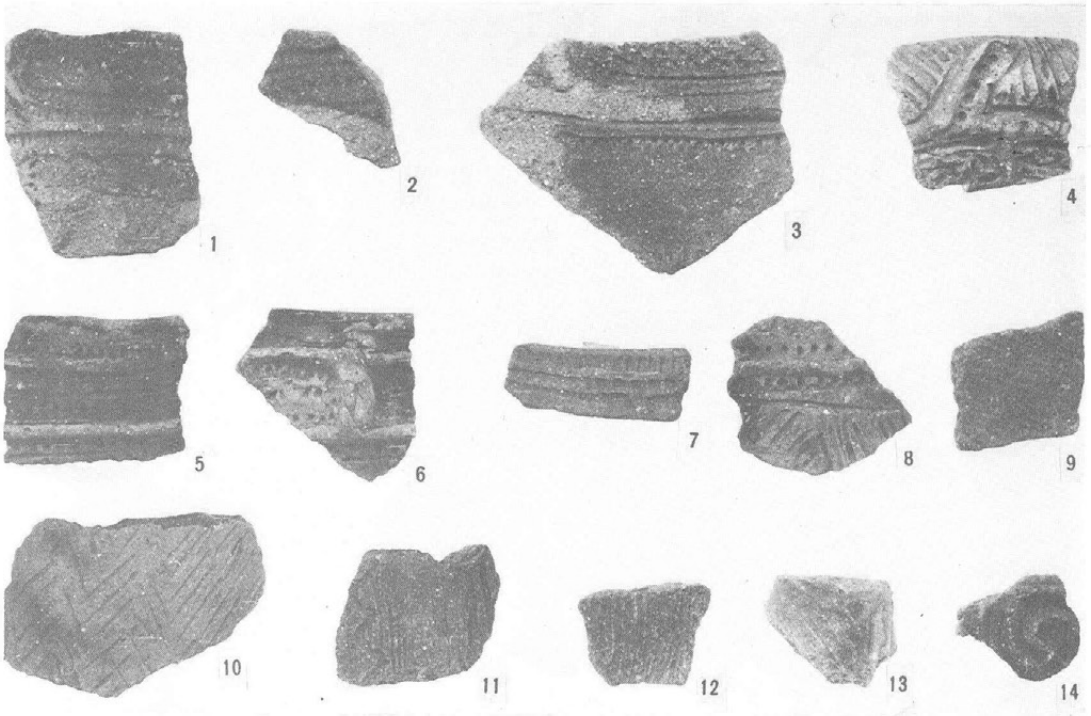
図版 20　出土土器



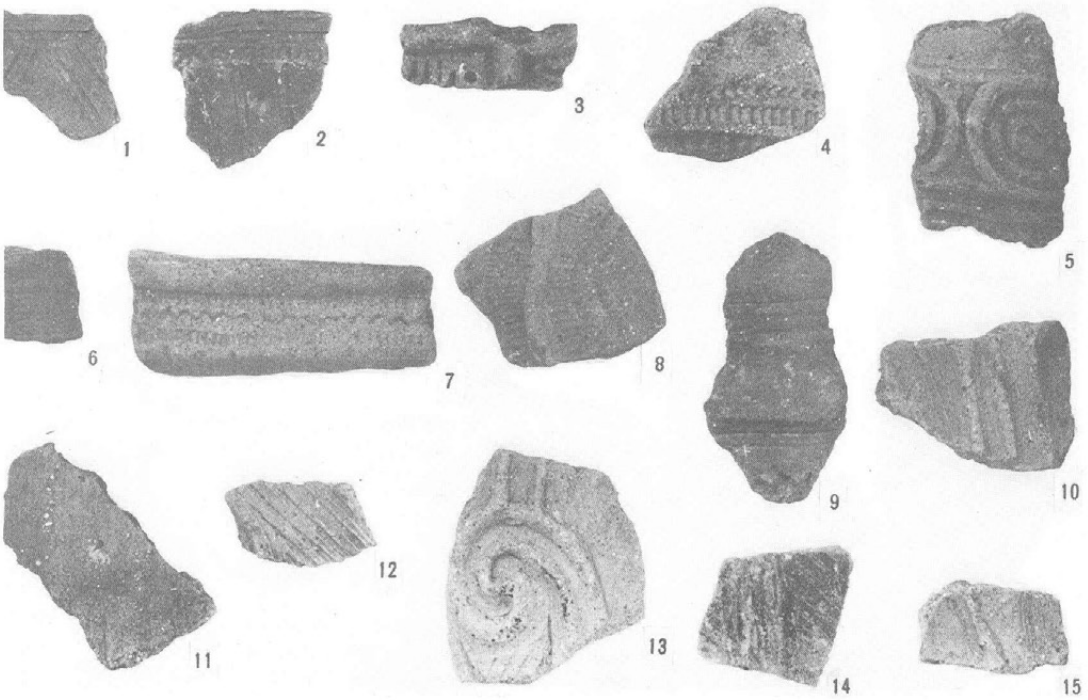
図版 21　出土土器



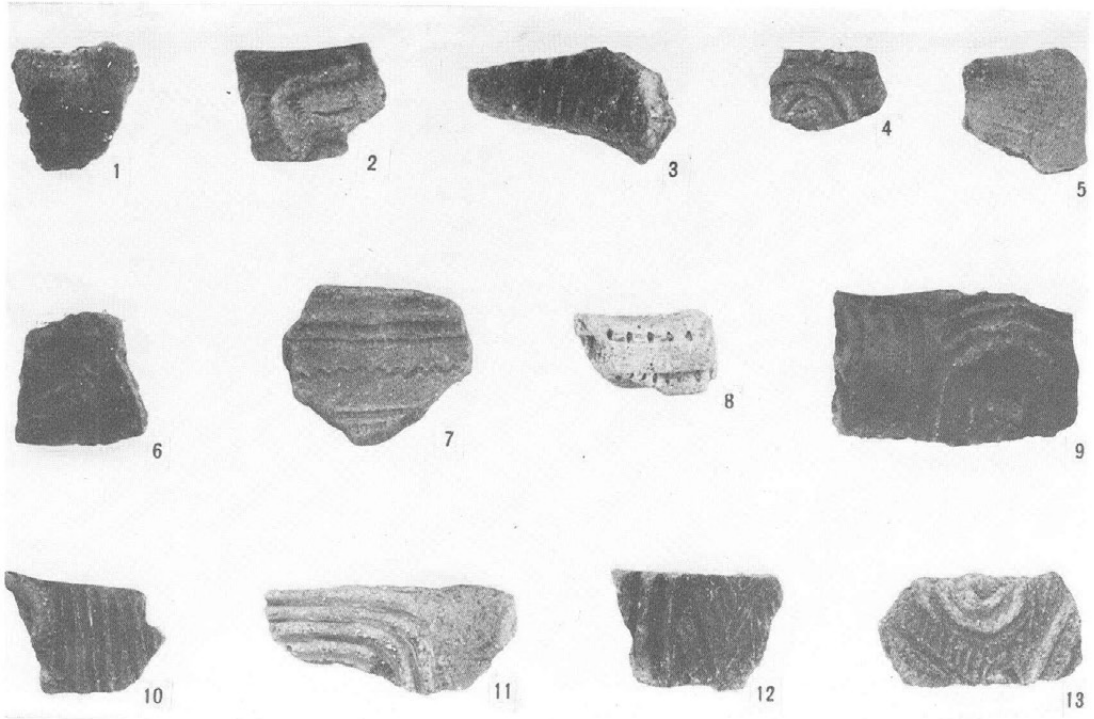
図版 22　出土土器



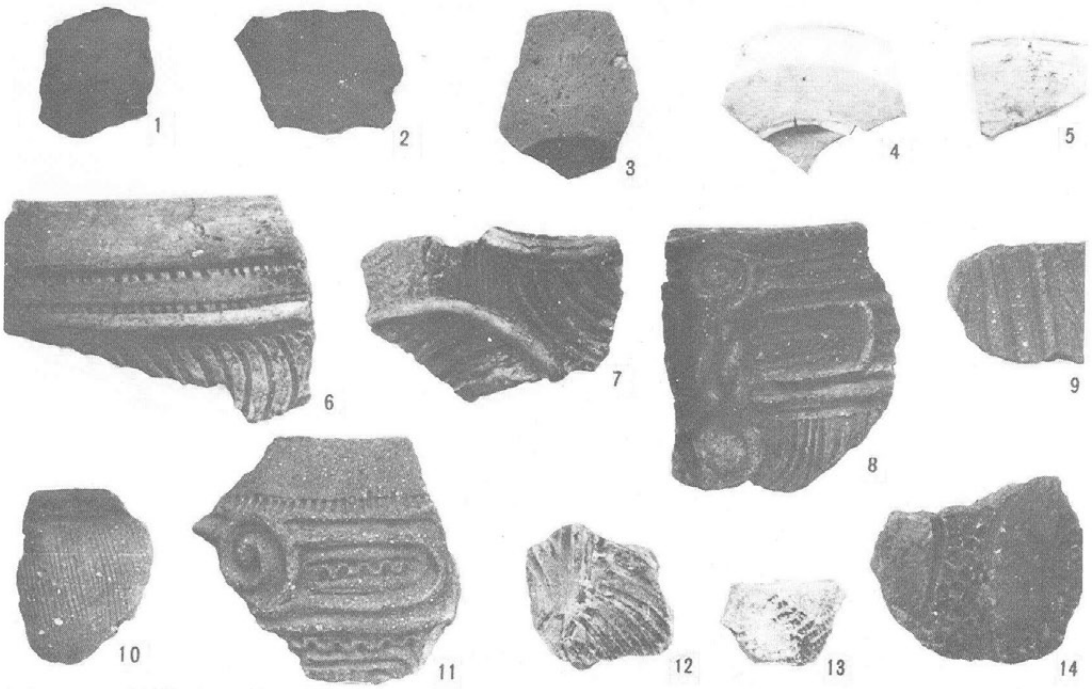
図版 23　出土土器



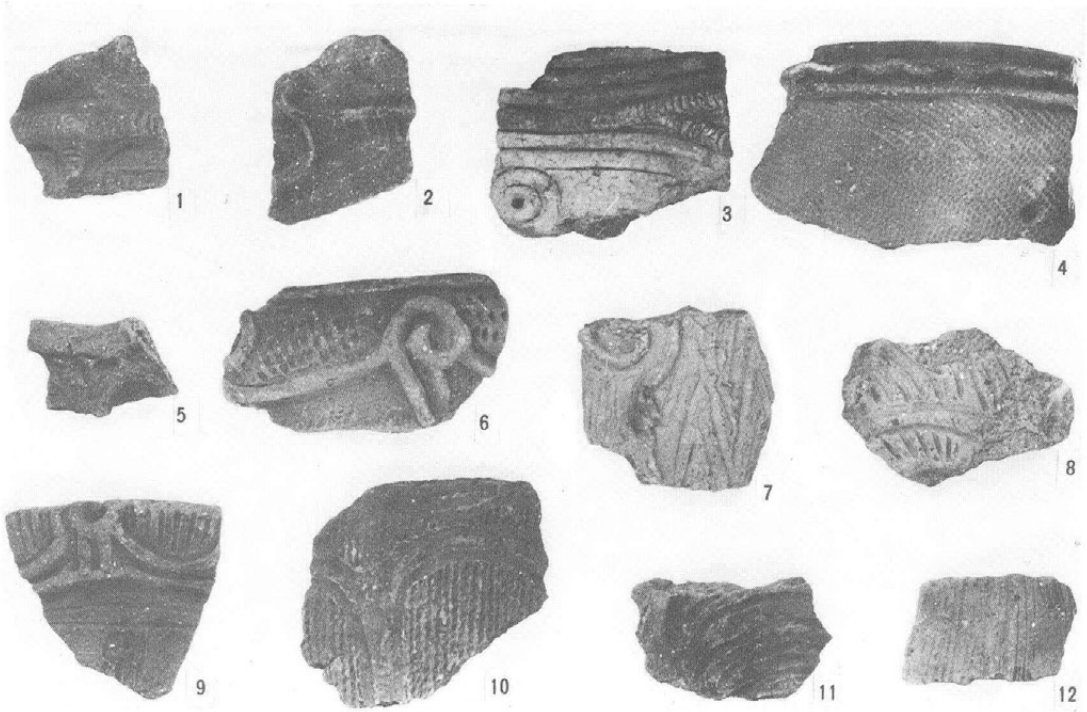
図版 24　出土土器



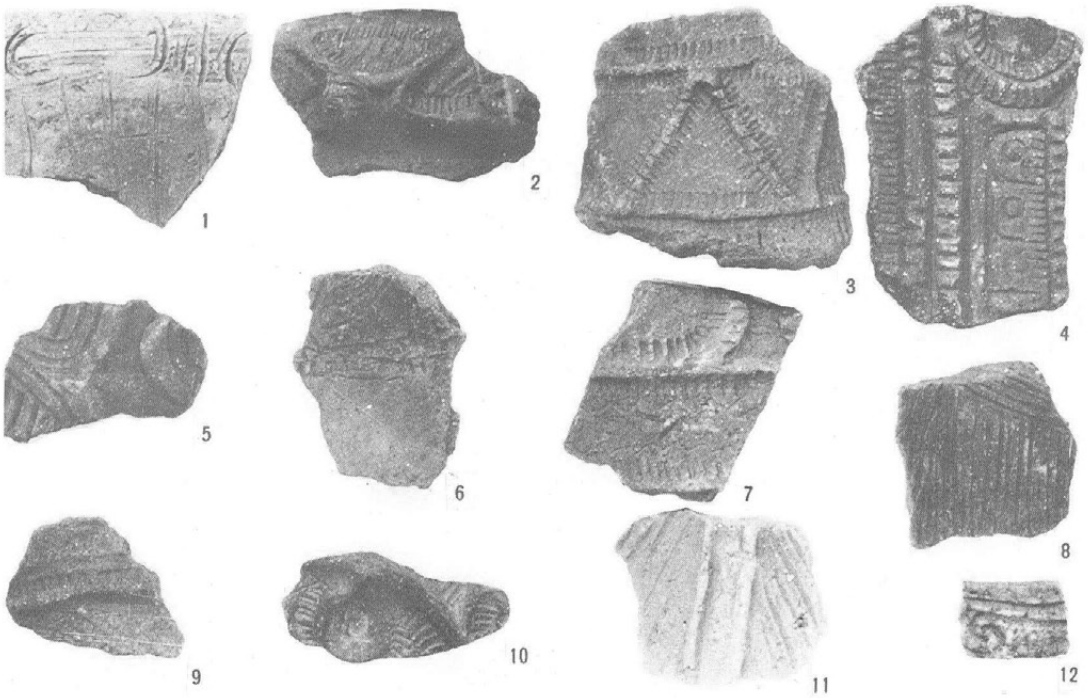
図版 25　出土土器



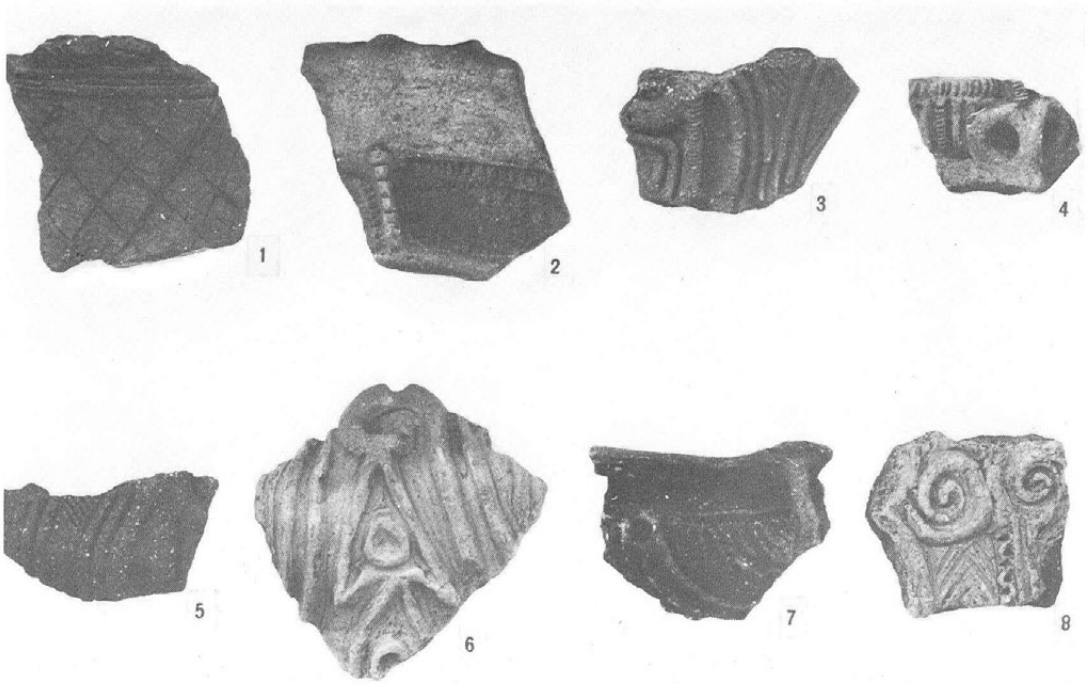
図版 26　出土土器



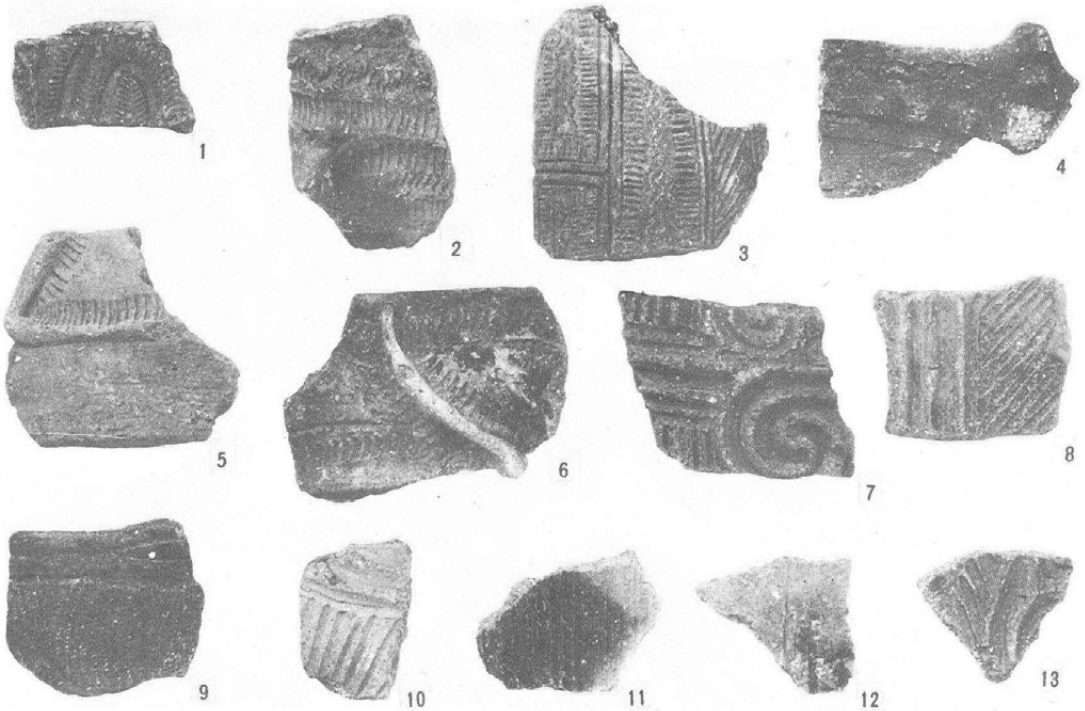
図版 27　出土土器



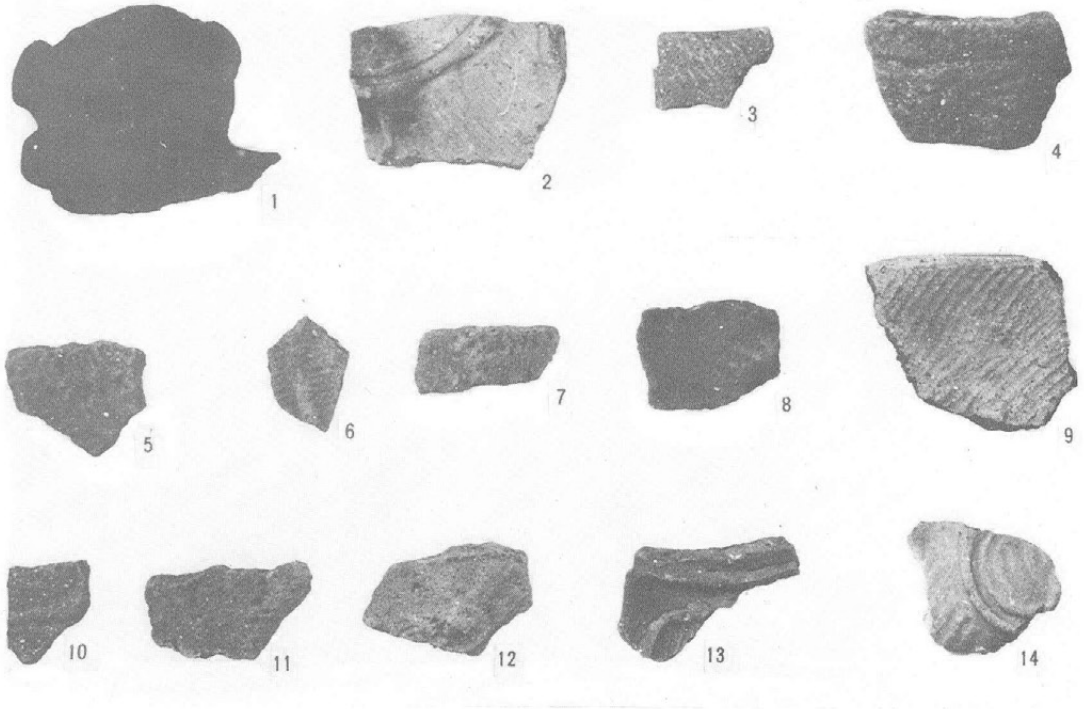
図版 28　出土土器



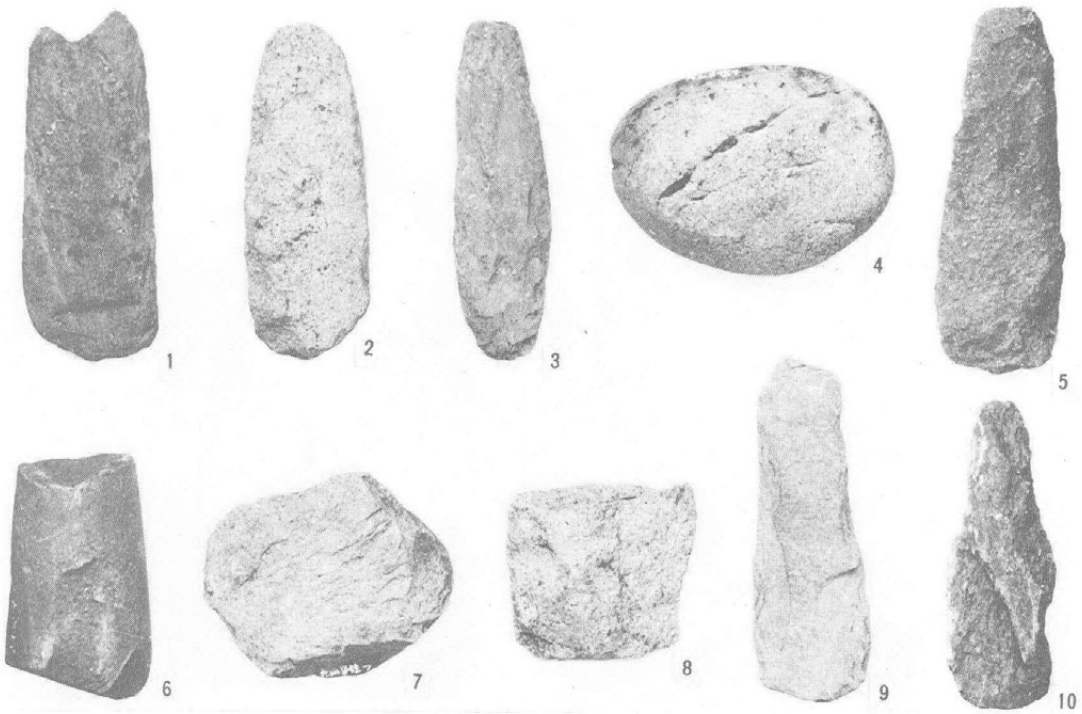
図版 29　出土土器



図版 30　出土土器

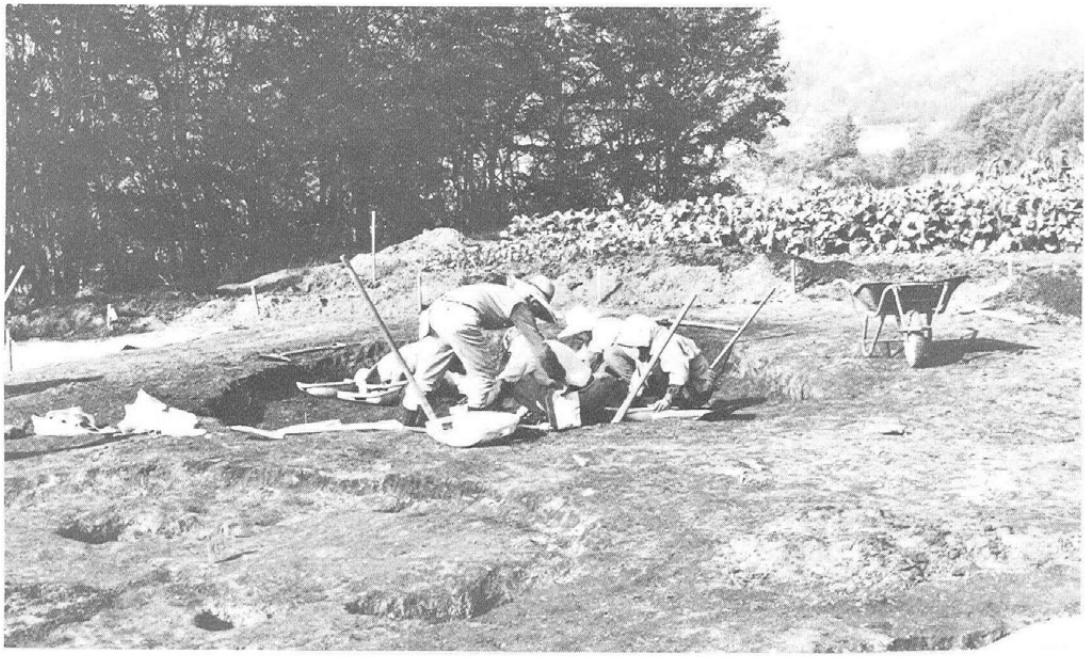


図版 31　出土土器



図版 32　出土石器

図版 33　出土石器



図版 34　発掘風景

丸山清水B遺跡緊急発掘調査報告書

昭和 53 年 3 月 15 日　印刷
昭和 53 年 3 月 20 日　発行

発行所　伊 那 市 教 育 委 員 会

印刷所　岡谷市川岸 108
中 央 印 刷 株 式 会 社